

UFO

GAP-JAPAN NEWSLETTER



UFOと宇宙哲学の専門誌

コンタクティー

contactee

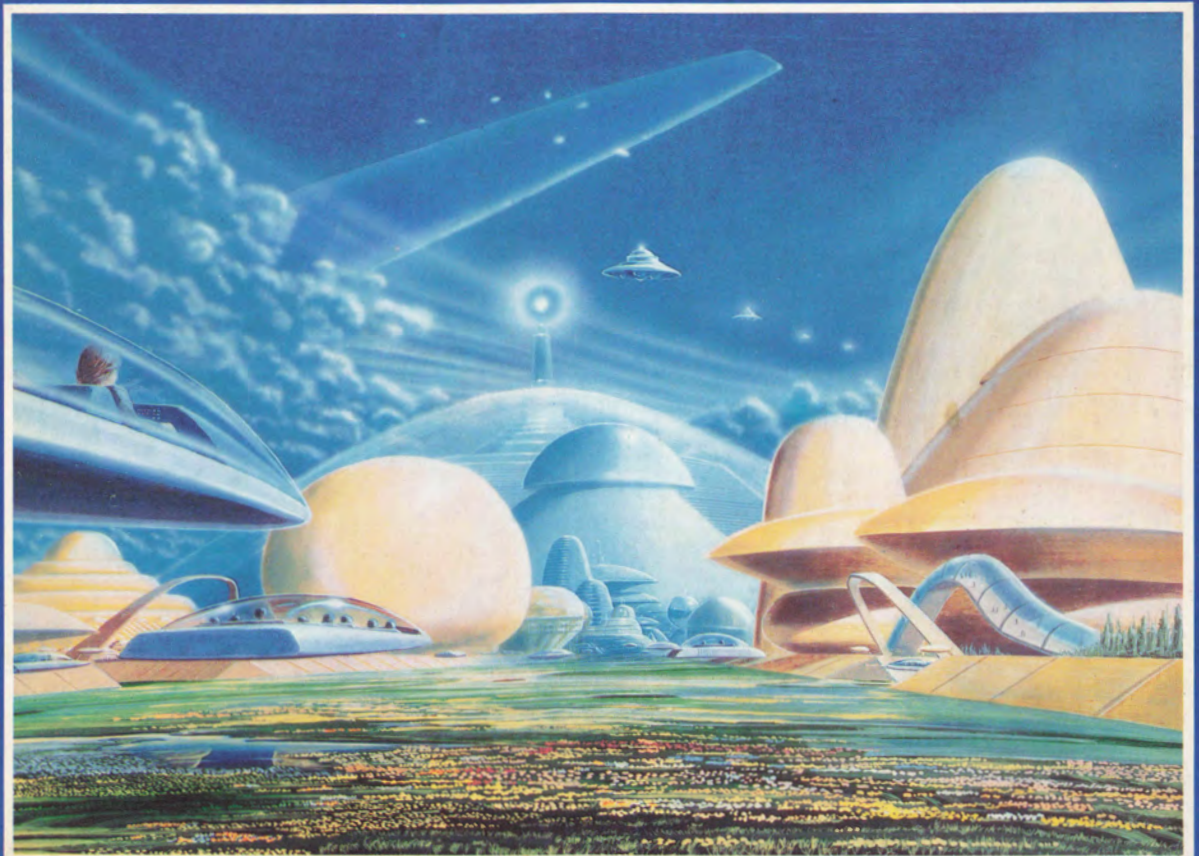
宇宙飛行士の月面の演技!?

SUMMER
1984

沖縄のUFO事件
テレパシー送信と奇跡的治癒
ある不思議な一夜

85

テレパシーと透視



〈巻頭言〉アダムスキー全集完結	1
宇宙飛行士の月面の演技!?	ウィリアム・L.ブライアン 2
沖縄のUFO事件	新里義雄 14
9,600メートルの高空から落下して助かった女性	21
テレパシー送信と奇跡的治癒	鈴木謙次郎 22
ある不思議な一夜	十菱 麟 26
テレパシーと透視	久保田八郎 28
〈読者の声〉コスミック・ポスト	34
〈報告〉松山支部大会	37
〈予告〉59年度地方支部大会 -その2-	38
〈広告〉アダムスキー全集 84年度第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」	39
日本GAP全国月例研究会案内	40



GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙イラストは土星の風景の想像画。日本GAP札幌支部会員・勝又英嗣氏画。

ついにアダムスキー全集が完結した。全七巻、総頁一八六〇頁。箱入りハードカバーの保存用極上本が書棚に並ぶと、威風堂々として他を圧し、宇宙的雰囲気放射する。

これは浅学非才の編者の力量よりも、旧友である出版元の文久書林社長・岸義信氏と専務・岸秀樹氏の英断の賜物であり、また日本GAP一千名会員諸兄姉の絶大なご支援のお陰である。衷心より感謝の意を表したい。

この際明確にしておく、この全集は編者(久保田)が企画して要請したものでなく、「おれはアダムスキーが好きなのだ」という岸社長が立案されて編者宛に協力を依頼してこられたのである。単行本としてバラで出すのではなく、かなりの資金を要する全集ものであるから当初売れ行きを懸念して返事をしぶったものの、編者がついに同意して了解したのは一昨年(五十七年)の十月であった。

その後まもなく或る場所へ夜間 UFO 観測に出かけたところ、実に十数回もオレンジ色の光体が出現して乱舞し、なかには火の粉を曳きながら上空へ垂直に上昇する円盤もあつたりして、宇宙の花火大会ともいふべき壮観な光景が展開して驚嘆した。後日わかつたのだが、これはアダムスキー全集刊行が決定したのを祝福してスペース・ブラザーズが出現されたのであつた。それ以前、同年の初夏にも編者はやはり壮絶な体験をしているが、そのときから全集出版の意欲が高じていたのである。その他、GAP内部で発生している出来事(複数)からみて、スベ

ース・ブラザーズが日本GAPを注目し、援助激励しておられることは間違いない。

この全集はアダムスキーがスペース・ブラザーズとコンタクトを開始して以来執筆した著作類を整理分類したもので、戦前の(コンタクト以前の)古い文献は一切割愛した。アダムスキーといえども地球人として精神の成長を経たのであつて、戦前の、特に一九三〇年代の文献や論文が多数編者の手元に保存してあるけれども、これらはコンタクト期の著作に比較すると見劣りするのを否定できない。彼の著書で燦然たる光芒を放つのは、

〈巻頭言〉 アダムスキー全集 完結



なんといつても「宇宙からの訪問者」に続く一連の書物で、三大哲学書「宇宙哲学」「テレビシー開発法」「生命の科学」は人間の宇宙的覚醒に必須の最重要な指導書であつて、読者はこれさえあれば充分である。アダムスキーは生前、「『生命の科学』の中の特に第一課と第九課が最も重要で、これをマスターして実践すれば行きたい所へ行けるようになる」と語っていたという。これは高次元惑星へ転生できるという意味である。

したがって全集編さんに際しては、コンタクト期の著作類のみを収録した。このようにしてこそ彼の名誉を称揚するこ

とになると考えたからである。彼の戦前の文献が除外してあるというので、全集ではなくて選集だと言う人がいるそうだがこれはおかしい。高名な小説家が作品を全集として出す場合も、不出来ものを削除する例はざらにある。だいいち一九三〇年代頃からのラジオを通じての彼の講演録すべての収集などできるわけがない。洩れが生ずるのは当然だ。

この世界ではだれかが「他人のやらないこと」をやると、一方では必ず非難や妨害をする者が出てくる。地球人には嫉妬というダニが食いついているのだろう。「密林の聖者」と謳われたシユバイツァー博士は売名屋と罵倒されたし、アダムスキーもひどい目にあつている。しかし真の勇気を持つ偉人は卑劣な陰謀、嘲笑、攻撃などに屈伏しなかつた。

我々もこれら偉大な先人の後塵を拝してスペース・プログラムの協力に微力をささげたいものである。少数でもよいから志を同じうする人達の結束と真剣な活動が続くならば、何らかの成果はあがるだろう。げんに日本GAP各支部の献本運動や月例研究会における真摯な研鑽などにより地道ながらもGAP活動が拡大の一途をたどっていることは喜ばしい。熱意ある会員の方々の献身的な活動にあためて深謝の意を表する次第である。

多数の読者にとっては全七巻の精読は時間的にも困難であるかもしれないが、読みたい巻ならばどれでもよいから書棚よりおろして毎日一―二頁ずつでも目を通すならば、そのうちハツとして重要な箇所気づくだろう。これを続けるなら

ばいつか宇宙的成長へとつながるのである。

編者も自分の拙訳ながら毎日どれかを読んでいる。そうすると文脈の中に以前には気づかなかつた深遠な意味がひそんでいることを悟り、愕然とすることがある。編者は生涯この反覆熟読をやめないうだろう。

五月には第一巻「宇宙からの訪問者」の再版が出るという。すでに多数の評論家や有名人がアダムスキー全集を読んでいる気配があるけれども、賢明な人達は表立って論評しない。沈黙を守っているだけである。それでいいだろう。だいいち有名であるほど支持を表明したくても地位や立場がそれを許さないのだ。こうなると編者のごとき無位無冠の無名人が断然有利である。この自由な立場を利用しないという手はない。今年も大奮闘するので大方のご声援をお願いする次第である。

読者の方々にもう一つお願いしておきたいことがある。全巻とも初版が売り切れた時点で出版社から再版が出るのだが、その際に初版に生じたミスプリント(誤植)を訂正するので、文字の誤りを発見されたならば遠慮なく巻数、頁数、行数を並記してご一報下されば幸いである。読者がみんなで協力して完全な良い書物に仕上げようという気持でご鞭撻の程をお願いしたい。

この全集出版に際して協力と祝福と激励をたまわつた多数の方々のご好意と偉大なスペース・ブラザーズの恩恵は終生編者の胸から消え去ることはない。

月面の驚異的事実を暴露した
ブライアンの『ムーンゲート』
は佳境にはいる

■翻訳連載権独占■ フォン・ブラウンの矛盾と、のらりくらりのNASA

MOONGATE By William L. Brian ウィリアム・L・ブライアン/久保田八郎訳

〈連載第3回〉

宇宙飛行士の月面の演技!?

第4章

宇宙船の速度、飛行時間、必要燃料などの矛盾点

フォン・ブラウンの矛盾

アポロ宇宙船が月に到着したとき、時速九、六〇〇キロメートル以下で飛行していたと、アポロ計画を取り上げた評論家たちは首尾一貫して報告した。これは宇宙船が時速三、二〇〇キロメートルをわずかに超えるスピードで平衡点を通過した後である。だが筆者は宇宙船が月に到着したときに出していた速度を導き出したはずの評論家たちによる計算結果をまだ見たことはない。したがってこの情報はNASA(米航空宇宙局)が直接または

間接的に流したと推測することは筋が通っている。そこで事実と数字とを調べてみると、ひどい矛盾が起こってくるのだ。まずあげると、六九、五九二キロという平衡点距離と、月の引力が地球の六分の一という説は、本書第二章と第三章で説明したように矛盾しているのである(訳注||本誌84号に掲載)。

一九七一年に書かれた『宇宙最前線』でヴェルナー・フォン・ブラウンは、アポロ8号が平衡点を通過するときと月に達したときの各速度を、それぞれ時速三、

五二〇キロ、九、一二〇キロと述べている。同じ箇所、月の引力は月から六二、二四〇キロの地点で作用を始めて、そこから宇宙船は再度スピードをあげ始めたとも言っている。平衡点から月へ行くときの速度の数学的計算をやってみると、時速九、六〇〇キロ以下で進行する宇宙船が月へ到着できる唯一の可能性は、六分の一引力説が正しいとすれば、平衡点は月から約五四、四〇〇キロとなり、六二、二四〇キロとはならない。したがって宇宙船は地球を出発して月から約三八、四〇〇キロの位置に到達するまでは、ずっとスピードを減らし続けることになる。しかしこれは先にフォン・ブラウンが述べたことと一致しない。月の強い引力の影響があるからこそ、より大きな平

衡点距離が存在するというのが正しいのか、それとも、より大きな平衡点距離があるというのとは間違っていて、月にはやはり六分の一の引力しか存在しないというのか、このいずれかととなる。なぜヴェルナー・フォン・ブラウンはこんな矛盾する情報を出したのだろうか。

飛行時間と平衡点との関係

月に到達するときの速度に関して、強い月の引力の影響を示す次のような情報がある。六分の一という月の引力は時速九、六〇〇キロをやや下まわるスピードに宇宙船を加速するけれども、一方、六四パーセントという月の引力ならば最終速度をかなり高く引き上げるといふことなのだ。付録Cでは、最終速度は六九、



五九二キロの平衡点距離でもって必要となる六四パーセントの月の引力を応用して出している。またこのことは平衡点における初速が時速三、五二〇キロであるのが正しいことを示している。こうなると最終速度は時速一、六〇〇キロ以上となるのだ。六九、五九二キロ平衡点で要求される速度と——そのゆえに月の引力は強いものとなる——、時速九、一二〇キロの公称値との食い違いは時速六、四〇〇キロ以上となる。

軌道周回速度を論じる前に、平衡点距離が六、四〇〇キロマークの付近にあることを明確に示す論拠を提示しておこう。アポロ8号の月飛行のとき、この宇宙船はいわゆる平衡点として月から六二、二四〇キロの位置に達した。時速三、五二〇キロで五五時間三九分を要したのである。六八時間五七分目にそれは時速九、六〇〇キロ以下で飛んで月に到着したのである。したがってその距離は一三時間一八分でカバーできた。

ところが、もし平衡点が実際に月から三八、四〇〇キロであるとすれば、その宇宙船の平均速度は時速約三、九〇五キロとなるはずで、月飛行は約九時間五〇分を要したにすぎないことになる。したがってNASAが出した時間は、より大きな平衡点距離を裏付けすることになり、これによって月の引力は強いことになるのである。

月の引力は地球の引力の六四パーセント！

飛行時間を詳細に分析してみると、さ

らに月の強い引力にたいする確証が出てくる。もし月が地球の表面引力の六分の一の引力をもつとすれば、アポロ8号宇宙船は三八、四〇〇キロの位置に到達するまでにスピードを落とし続けたことになる。そして平衡点で加速し始めて、月では時速約八、八六四キロの最終速度に達したはずである。かりに月から六二、二四〇キロの位置で時速三、五二〇キロで進出したとすれば、その飛行時間は一六時間四四分となるはずだ。ただしこれは六分の一の引力と仮定してのことである。これはNASA発表の一三時間一八分という時間と三時間以上の食い違いを示す。NASA発表の短い飛行時間にたいする唯一の説明は、宇宙船にもっと高い平均速度と最終速度を与えれば可能となる。

ここで月の引力は地球のその(六分の一ではなく)六四パーセントであると仮定すれば、飛行時間は一三時間四七分と計算されることになり、NASA発表の一三時間一八分にきわめて近くなる。

この分析によって確実にわかるのは、NASA発表の情報はそれ自体が矛盾しているということだ。その飛行時間と平衡点距離は月の強い引力を暗示しているのだが、しかるにNASAは月の弱い六分の一の引力説を公表し続けているのだ。

もし月が地球の引力の六分の一しか持たないものならば、月の軌道を回る人工衛星または宇宙船は非常に低い軌道周回速度を持つことになるだろう。これは軌道周回速度が引力と相殺するからである。もし引力が弱ければ軌道を回るのに必要な速度は低くなる。つまり落下する傾向

が弱まるので、人工衛星は低速で軌道周回を続けることができるのである。これが六分の一の引力ならば、高度一二二キロで月の軌道を回る人工衛星は時速五、八四八キロで飛ぶにすぎないことになる。しかし月の引力が地球のその六四パーセントならば、同じ高度の軌道周回速度は時速一一、四六〇キロになるだろう。

つまり公称値のほとんど二倍になるのである。エンサイクロペディア・ブリタニカの「宇宙探検」の項に、アポロ11号は時速八、三六〇キロで飛んで月に到着し、楕円軌道に入るのに時速五、八八八キロに速度を落とす必要があったと述べられている。月の引力を六分の一とすれば、宇宙船はこんな低速ならば岩石のように落下してすぐに月面に撃突するだろう。

明白なのは、引力が強ければアポロ宇宙船にブレーキをかけて速度を落とし、周回軌道に乗るには、時速一六、〇〇〇キロ以上から一一、四六〇キロに減速するだけでよい。この軌道周回速度は宇宙船が二時間ごとに月を一周するかわりに一時間ごとに一周することを示している。

こうした軌道周回周期の知識は管制センターの職員に知られていたにちがいない。というのは、各軌道のある部分で、司令船が月の裏側を通過するときに、その司令船との通信がとどえるからである。この通信の途絶は各一二〇分の軌道のうち五〇分間続いたという。付録Dには、速度と通信途絶時間が一一二キロの高度の軌道にもとづいて導き出されている。これが六四パーセントの引力ならば通信途絶の時間は二四分間にすぎない。

もし右の状況が発生したとすれば、大衆に情報を隠すためにかなり嚴重な防御策が講じられたにちがいない。宇宙飛行士の活動をモニターする唯一の手段が管制センターを通すことにある限り、比較的少数の人々だけが実際にその状況に気づくだろう。NASAの多数の人々は依然としてツンボ機数におかれるだろう。そうだとすれば最も嚴重な防御地域は管制センターということになり、しかも以下に示す情報がこのことを示しているのである。

のらりくらりのNASA

ジョン・ノーブル・ウィルフォードはニューヨーク・タイムズ紙にアポロ飛行について書いている。その著書「我々は月に到着する」の中で、彼はアポロ計画をかなり詳細に論じているが、これはNASAで働いた彼の体験にもとづいたものである。以下の情報は彼の著書から引用した。

グリーンム、チャフィー、ホワイットの命を奪った火災について、彼はヒューストン有人宇宙航行センターがNASAへの電話でテープ録音について話するために身の毛のよだつような言葉を用いたと書いている(訳注)一九六七年一月二十七日、最初のアポロ有人宇宙船がケネディ宇宙センターで火災を起こし、サターンIB打ち上げロケットの先端にあつたアポロ船内にいた前記三名の飛行士が死亡した。火災原因は不明とされている。しかしNASA側はそのテープによる

証拠については知らない」と主張したが、一月三十一日にウィルフォードがニューヨーク・タイムズ紙に記事を書いたのである。この事件は誠実さの欠けたことを示すものであり、後に大衆と議会はその責任がNASAにあることを知ったのだ。

火災のあった週末中、記者連は自分たちの質問にたいしてあいまいな言い逃れの回答を絶えず受けたが、このことはジエミニ8号を思い出させた。ジエミニ8号のカプセルがコントロールを失って、危機が発生中に録音された通信テープが隠されたのだが、これは宇宙飛行士の音声レベルが彼らの行動について誤った印象を与えるかもしれないとNASAが信じたからである。

そのテープは後に公開された。これが完全なものだったとすれば、宇宙飛行士たちはすごいコントロールによってうまく処理していたことになるのだ。後に記者団はNASAの各頭文字をNever A Straight Answer（絶対に率直な回答を与えない）を意味するものだと言い始めた（訳注：一九六六年三月十六日に打ち上げられたジエミニ8号は、先に打ち上げられたアトラスDロケットのアジュナ段とランデブー・ドッキングしたが、激しい横揺れが起こったために切り離して手動操縦装置により事なきを得た）。

大衆は盲目にされている

「アポロの航行・月の探険」の中で、リチャード・ルイスは、アポロ12号の飛行中に管制センターがどのような状況で

あったかを説明している。以下は彼の記事の要約である。

真夜中のこと、管制センターの制御盤の背後にあるガラス張りの展望室は重要人物で一杯だった。ペイン所長、ジョージ・M・ロウ副所長、宇宙飛行士のアームストロング、オールドリン、ポーマン、アポロの慣性誘導システムを開発したマサチューセッツ工科大学の装置研究所々長C・スターク・ドレーパー、それにヴェルナー・フォン・ブラウンなどである。ニューズメディアのだけ一人として居合わせなかった。管制センターに新聞記者が入ることは許されなかったのだ。これはそのような規制がマキユリー計画で確立されたからである。災害が発生したときに無秩序な報道が流れるのを防ぐためらしい。これはアポロ計画のずっと後の部分まで続いたが、ついにある共同ニュースサービスの代表者がジョンソン宇宙センターの展望室へ入るのを許されにくざれた。

以上までに提供した情報に照らしてみると、このようなきびしい防衛手段がとられたのは単なる偶然ではないようだ。明らかに大衆はNASAによって慎重に選ばれた情報しか知らされていないのだ。そのなかには真実なものもあるが、大部分は月の六分の一引力の古い概念にもついていた完全なでっちあげであったにちがいない。

ペイロードとは何か

月への道で出くわす種々の矛盾を概説

するにつれて、宇宙船が月周回軌道に乗る話になってきた。次の段階は、月着陸船の燃料の必要条件に与える強い月の引力の影響を考えることにある。これは新たに恐怖の部屋を開くのだ。

惑星の表面から脱出するか、またはそれを回る軌道に乗るには、宇宙船を軌道の高さまで持ち上げて一定の最少限度で飛行させねばならない。これには絶えず引く張ろうとする引力に打ち勝つためと、宇宙船の運動エネルギーを増大させるためのエネルギーを必要とする。読者は、月へ人間を送り込んだアポロ打ち上げロケットが高さ一〇九メートルもあり、二、九〇〇トンの重量があつたことを思い出されるだろう。打ち上げ時のアポロ11号ロケットの写真は本書（原書）の表紙写真の一つに示されている。これは時速三四、〇〇〇キロの速度で月に向かって約四五・三トンのペイロードを送るために設計された（訳注：ペイロードは有用荷重といい、旅客機ならば乗客と貨物、宇宙船の場合は塔乗員と観測機器を意味する）。

アポロ4号ロケットは地球を回る一一六キロの高度の円形軌道に一二五・四トンの物体を乗せた。地球から脱出するのに必要な燃料と速度を増大させれば、月に送るよりもはるかに大きなペイロードを軌道に乗せることができる。ロケットの総重量をペイロードの重量で割れば、ペイロードの比率が出る。アポロ4号の場合は、二、九〇〇トンを一二五・四トンで割るのだから二三対一の割合となる。このことは地球周回軌道に物体を乗せる

にはペイロードの二三倍の打ち上げ重量が必要であり、ロケットの重量の約九〇パーセントは燃料であることを意味するのである。

もし月が地球の六分の一の引力しか持たないとすれば、月着陸船が軟着陸したり月から脱出したりするには、うんと低いペイロード比が必要になるだろう。NASAの主張によれば、月着陸船は燃料満載時に一五トンの重量があつたという。これは上昇と降下の各段を含んでいる。月面に着陸しているアポロ16号の着陸船は上昇と降下の両段から成っているが、この写真は本書の（原書の）写真に出てくる。塔載された上昇段は四・八トンの重量があり、空の降下段は二トンの重量があるから、軟着陸の総ペイロードは六・八トンである。したがって軟着陸のペイロード比は一五トン割る六・八トンとなり、二・二対一となる。

塔載された上昇段は燃料満載時に四・八トン、空で二・一七トンの重量があつたと思われるから、上昇ペイロード比はやはり二・二対一となる。もし月の引力が六分の一しかないとすれば、満タン時と空の着陸船の各重量は必要な燃料の量と一致する。燃料を入れておくタンクの大きさすらも妥当なものであるから、宇宙船の総重量は月の弱い引力の必要条件に一応びつたりと合うのである。

もし平衡点距離が月から三八、四〇〇キロであるとすれば、六分の一の引力は考えられることであり、燃料の必要条件も満たされたと思われる。宇宙飛行士たちは着陸船で月面に着陸してから離陸し、

計画どおりの月面探険を遂行できたであらう。

アメリカの月着陸の成功の謎

しかしここには六九、五九二キロという別な平衡点距離と、それが意味する月の強い引力の問題が残っているのだ。月の引力は少なくとも地球の引力の六四パーセントはあるはずだという情報によって、着陸船の燃料の必要条件が付録Eで計算されている。それによる月の引力の数字は、着陸と離陸に必要なペイロード比は少なくとも七・二対一になるはずであることを意味している。必要な軌道周回速度は、六分の一引力のもとで必要なもの約二倍である。こうなると減速または上昇時の燃料は約四倍も多くなるのだ。

月の強い引力のもとでは燃料増加はすごいものとなる。まず上昇段は空の重量の七・二倍、すなわち一五トンになる。次に燃料を満載した上昇段を軟着陸させるのに必要な燃料は、着陸船の総重量を約一一三トンにまで増大させるだろう。したがって着陸船は一四九トンの重量と三メートルの高さをもつタイタン2号ロケットとほぼ同じほどの大きさになるだろう。

月着陸船は一五トンの重量があると思われていた。したがってその重量と体積を七倍以上もふやす必要がある。

驚くべき結論は次のとおりだ。もし人間が実際に強い月の引力条件下で月面に着陸したとすれば、それはロケットで着

陸したのではないということだ！ 再度言うくと、六九、五九二キロの平衡点距離は、地球の引力の六四パーセントに等しい引力が月にあることを意味するのである。かわって、六四パーセントもの引力が月があれば、月から脱出するだけでも大きなロケットが必要となる。まして離陸用ロケットを初めに軟着陸させることなどできるわけではないということになる。

かりに月が地球と同じ強さの引力を持つとしたら問題は大変なことになる。そうかもしれないということを示唆する証拠をあとで出すことにしよう。付録Eでは、月の引力が地球のそれと等しいとして、ペイロード比が一八・二になるはずであることを示している！ そうなると三九・六トンの上昇段が必要となる。降下ロケットになると七一・九・八トンという驚くべき重量となるが、これはサターン打ち上げロケットの大きさの四分の一である！ そうなるとサターン打ち上げ船はこの六四倍の重量を必要とするので、四六、〇〇〇トンとなる。これは実際よりも約一六倍大きい。

以上の謎によって興味深い疑問が少々起こってくる。なぜソ連は月面に人間を送り込む一歩手前まで来ながら宇宙開発競争から手を引いたのか？ 月の強い引力条件下なら明らかにロケット類は作動しないのに、アメリカはどのようにして成功したのか？ 月着陸を成功に至らした極秘研究における軍部の関与はどのようなものだったのか？ 右の疑問にはあとの章で答えることにしよう。

証拠のすべてが出てくるまでは大がかりな隠蔽の真情は不完全であり、多くの疑問が未解決のまま残っている。アポロ計画のあらゆる面が慎重に調査されるまでは、読者はオープン・マインド（寛容の心）を保たれたい。

結局、大衆は取り込み詐欺師、政治家、軍事専門家、科学者、会社などによって長いあいだ犠牲にされてきたのだ。納得させられるような話を聞けれど、主張を実証するしつかりした証拠はほとんど

第5章

月面における宇宙飛行士の体験

彼らは月面では何もしなかった

のだ。

月の引力は地球の引力の六分の一であるということになっている。この引力ならあらゆる物体は地球上の重量の六分の一、すなわち一六・七パーセントになるはずだ。体重八二キロの人はわずか一三キロに減るだろう。アメリカの宇宙開発計画やアポロ計画が始まる前から、評論家たちは月面上の人間の運動能力についてあれこれと考えており、その計算は六分の一の引力を基にしていた。大衆も宇宙飛行士が月を探険するときのすごい運動能力による離れ業を期待していたが、しかし何も演じられなかった。読者は月面を動きまわる宇宙飛行士がテレビの画面に映つたのを覚えておられるだろう。覚えておられるならば、筆者は読者が何か異常な離れ業を見たのを思い出して頂きたいと言おう。実際には何もなかった

ど出てこないのである。月が強い引力を持つとすれば、宇宙飛行士たちは六分の一引力のもとで期待どおりの行動はできないはずである。月面上の彼らの跳躍能力の誇示は予想された結果とはほど遠いものになるだろう。次の第5章では六分の一引力の条件下で予想される宇宙飛行士の運動の離れ業を分析し、月面で実際に行動した様子と比較することにしよう。

サイエンス・ダイジェスト誌の一九六七年十一月号には、「月面での歩き方」と題するジェームズ・R・ベリーの記事が出ている。その中でベリーは、人間は月面で四・二メートルにも及ぶスローモーション跳躍や後ろ飛びができるだろうし、プロのような運動もできるだろう。また両腕でハシゴやポールなどを容易に持ち上げることができると予測している。

別な予測が「月に関するアメリカのニューズ・アンド・ワールド・レポート」の執筆者たちによってなされた。

「地球の六分の一の強さしかない月の引力なら、月で野球をやればホームラン打者は八〇メートル以上もボールを飛ばせるだろう。ティーから打ち出すゴルフアーのタマは地平線を越えて飛ぶかもしれない」

引力の場の中で一つの物体が飛び上が

る高さは初速にかかっている。もし物体が六分の一の引力の場で地球と同じ初速をもつていたとすれば、六倍の高さまで上昇するはずである。その物体の初速が地球の速度の二倍になれば、二四倍の高さに達するし、三倍になれば地球の高さの五四倍になる。

人は自分の膝を曲げてから腿の筋肉をいっばいに伸ばして垂直にジャンプする。そうすると一定の初速で地上から飛び上がる。もし宇宙飛行士が地球で行うのと同じ勢いで六分の一の引力を受けながら垂直に飛び上がるとすれば、初速は地球上よりもはるかに大となるだろう。したがって宇宙飛行士は六倍以上も高く飛べるはずである。

ヤングの演技？

このような例を持ち出そうとして、今ここに六分の一の引力と地球の引力でジャンプ力を比較するために控えめな手がかりを引き出した。面倒な要素は飛行士が身につけている宇宙服と背のうの重量である。NASAの発表によれば服装一式は八四キログラムの重さがあるという。これを地球上で着て歩くのは身震いするほどの重量だが、六分の一の引力なら問題は無い。いま宇宙飛行士の体重が八四キログラムあり、服装一式が同じ重量としても、六分の一の引力ならば二八キロにすぎない。これは地球における宇宙飛行士の体重のわずか三分の一である。したがって飛行士は重い物を身につけずに地球上で飛ぶよりも、はるかに高く垂直に飛び

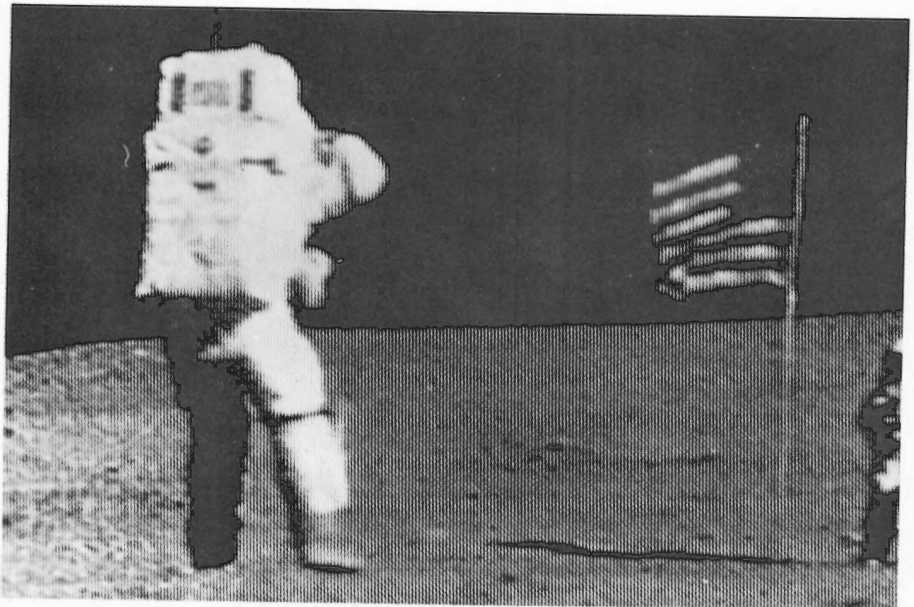
上がることができたはずだ。

多くのプロスポーツマンは、バスケットボールのレイアップみたい体にいっばいに伸ばすと地上メートルを超えてジャンプできる。こうしたスポーツマンは例外だが、コンディションのよいときの一般人でも垂直飛びで四五センチは容易に飛べる。宇宙飛行士も地球上で普通に飛んでこの程度は可能だろう。アポロ16号が月に着陸したとき、ジョン・ヤングの垂直飛びを筆者は何度もフィルムで見たが、宇宙服の機動性と飛んだ高さについては問題がある。

地球上で少なくとも四五センチの垂直飛びをするには、八四キロの体重の人に約二二七キロの上向きの力を出すことによって可能になる。巻末の付録Fに方程式が載っているが、それには六分の一の引力で宇宙飛行士が飛んだ高さ、(背中に体重と同じ重量の荷物を背負っている)、地球で荷物なしに同じ飛行士が飛んだ高さの比較が出してある。いずれの場合でも上向きの力は同じだと考えられる。直立したままの垂直飛びでは両膝をわずかに曲げるだけだから、宇宙服は飛行士にたいしてほとんど妨げにはなるまい。月面のジョン・ヤングのテレビに映った姿は、正常な飛び方で飛ぶのに両腕と両足を用いることができたことを示している。

付録Fで計算された比較ジャンプ力の比は結局四以上であることがわかった。これが意味するところは、宇宙服を着ている、もし月の引力が地球の引力の六分の一だとすれば、ヤングは月面で一・

▼アポロ16号のジョン・ヤング機長が月面で飛んだ瞬間。



八メートル以上をジャンプできたはずだということだ。だが実際には彼のジャンプは地面からせいぜい四五センチ離れたにすぎない。筆者が観察したところによると、ヤングは数度、できるだけ高く飛

ぼうとしたけれども、四五センチ以上の高さに達することはできなかった。ヤングは本書(原書)の写真2にジャンプの一つでピークに達した光景を見せている。旗竿に比較して彼のヘルメットの上部の

位置に注目されたい。批判する人は、彼が本当に飛んでいるのではなく、わざと最小限度の高さを保っているのだと言うかもしれない。しかし、もしそうだとすれば、背中の荷物や宇宙服なしに地球で同じようなジャンプをやれば、わずかに二センチそこらしか浮き上がれないだろう。

したがって、これはおそらく月には弱い表面引力しかないことを見せかけようとするヤングの最後のチャンスだったのだろう。なぜ彼は一・二メートルも飛んで世界に印象づけようと納得のゆく動作をしなかったのか？ だが筋の通ったジャンプをやれば、月には弱い引力しかないという決定的な証拠となるだろう。しかも弱い引力ならば、荷物を背負い、宇宙服を着ていてもケガをする危険はほとんどないということになるのだ。

宇宙服は障害にならぬ

宇宙飛行士が月面で約四五センチしか飛び上がることができなかったという知識をもって、さらに宇宙服の重量がNASAの言うとおりだとすれば、月の引力はひかえめにみても地球の引力の五〇パーセントはあると付録Gで計算されている。もしNASAが宇宙飛行士の服の重量を大げさに言ったとすれば、月の引力は少し強くなるはずだ。続く証拠は宇宙服の重量が三四キロほどであったことを暗示している。付録Hでは月の引力は地球の引力の七一パーセントあると計算されているが、これは次の仮定にもとづい

ている。

「ジョン・ヤングは月面で四五センチ飛び上がった。彼の宇宙服と背中の荷物は地球でなら各三四キロの重量がある。そして彼は地球でなら身に何も着けないで四五センチ飛び上がるだろう」

多くの評論家は、アポロ11号の宇宙飛行士が着用した宇宙服は極端に窮屈であるという印象を与えているようであった。だがウィルフォード著の『われわれは月に到着する』から引用する次の情報は、これは必ずしも当を得ていないことを示している。ウィルフォードの述べるところによると、ニール・アームストロングは地球の六分の一の引力のもとで、かさばった宇宙服と重い荷物を身につけながら容易に動きまわることがわかったという。その服は地球でなら八四キロもあるものだが、中にいる人間は歩いたり土を掘ったり登ったり月面に装置をおいたりできるほどに柔軟であった。またウィルフォードは、宇宙飛行士たちは月面で予想したほどに歩行や仕事に難儀を感じなかったし、カンガルーが飛ぶように容易に飛び上がったと述べている。

六分の一の引力説は、「宇宙飛行士たちはどのように行動すべきであったか」にくらべて「彼らが実際にはどのように行動したか」を説明するほうに問題をひき起こすのである。ジャンプするときの困難さは宇宙服のかさばりのせいではない。しかし実質上の月の引力は各種の問題を生じるだろう。

嚴重な秘密保持

これまで出された情報に照らしてみると、秘密漏洩防止策が管制センターばかりでなく月面の宇宙飛行士の会話にまで及んでいたということは読者にとつて驚くにあたらないだろう。宇宙飛行士がしゃべった望ましくないコメントを削除して編集し直す能力を当局は大衆へ伝達する前にいつも身につけていた。地上の管制センターが月から情報を受けて、それが一般のテレビに流されるまでには遅れがあったのだ。

以下はルイス著の「アポロの航行」からとつた情報の要約である。これはアポロの使命活動に行使されたコントロールの度合を指摘している。それによると、宇宙飛行士の仕事はすべて前もって慎重に筋書きが書かれていた。宇宙飛行士たちは予定どおりに滞在するために、芝居の俳優のように忠実に筋書きに従うようにきめられていた。あらゆる行動が計画され、時機が定められ、記録されていたし、計画からどのように脱線しても、うまく説明し、正当化されたのだ。事実上、あらゆる出来事や行動は飛行計画によって左右されていた。この計画書なるものは電話番号帳ほどもある大きな台本である。

飛行士たちの会話でさえも慎重にコントロールされたらしい。特に飛行士たちが映画に撮られているか、またはテレビ用に録画されていることを知ったときは、なおさらであった。飛行士たちの一人が

緊急連絡をすると、これは当局によってあとから説明されるのである。

アポロ12号は11号による最初の月着陸よりももっと広範囲な使命を帯びていた。アームストロングとオルドリンは月面に二時間半しかいなかったのに、コンラッドとビーンは宇宙船から八、〇〇〇メートルも離れて、合計七時間以上もついでしている。この月飛行は多くの科学実験を含んでいたが、そのなかにはアルミニウム箔シートによる太陽風粒子収集の実験もある。これは後述の大気に関する章で述べることにしよう。

月の引力は六分の一ではない！ はるかに強いのだ！

月の引力が強いことを暴露したアポロ12号の最初の重大な矛盾は、コンラッドが月面に向かってハシゴの最下段から最後の九〇センチを飛び降りた直後に起こった。以下の情報はルイスによるその事件の記事を要約である。

「コンラッドが月着陸船の着陸パッドの上にとつたとき、彼は、その最後の一步はニールには小さな一步であったかもしれないが自分には長い一步だったと述べた。続いて彼はパッドを離れて、かなりうまく歩けると言ったが、落ち着いて自分のやっていることを見つめる必要があるとも言った。コンラッドが石のサンブルを拾い上げようとしたとき、ビーンが『倒れるな』と注意した。コンラッドが前方へかみすぎていのように見えたからだ。もし倒れたら宇宙服を着ているた



▲月面に降りるニール・アームストロング

めに起き上がるのが困難なだろう。そこでコンラッドは、ピーンが自分で思うほどに早く敏速に動けるとは思わなかつたと言った。

右の出来事ではどうやらコンラッドは最後の九〇センチのジャンプのことを言っていたらしい。というのは彼はニール・アームストロングの地面への飛び降りるに言及したのであって、ハシゴの最下段への一步のことを言ったのではないからだ。六分の一の引力で九〇センチの高さから飛び降りるのは、地球で一五センチの高さから飛び降りるのと同じだろう。重い生命維持装置を背中につけていてさえも、九〇センチの飛び降りるは宇宙飛行士にとってほとんど何ということはないだろう。彼らは自分の腕の力だけで体を降ろすことができたはずだ。いかなる困

難をも感じる余地はないことになる。

コンラッドが地面を動き始めたとき、彼は重量のトラブルを体験したにちがいない。しかし重い宇宙服を着ていてさえ、宇宙飛行士たちは六分の一の引力で倒れたにしても立ち上がるのに問題はなかったはずである。彼らは自分の腕の力だけで地面を押し立て立ち上がれるだろう。彼らの月面での体重はわずか二七キロしかないからだ。しかし出てきた証拠は六分の一の引力説を裏付けていない。月の引力は地球の表面でみられる引力に近いことを示しているのである。

ライフ誌一九六九年十二月十二日号に掲載された写真には、アポロ12号の宇宙飛行士アラン・ピーンが重量八六キロもあるというパーベル型の荷物を運ぶ姿を示している。この荷物は月の引力下で一三キロしかないという写真説明は、その写真と矛盾している。なぜならその写真では径約二・五センチの横棒が曲がって見えているからだ。この写真は本書(原書)では写真3として掲載されている。この光景を撮影した映画ならばもつとつきりする。ピーンが月面上をこの荷物をかかえて動くにつれて、両端の重い荷物により横棒が上下にたわむのだ。またその荷物はピーンの動きからみると相当に重いことは明らかだった。

残りのアポロ飛行について述べる前に、月旅行のために宇宙飛行士がどのような訓練を受けたのかを調べるのは価値のあることだ。八四キロの体重の飛行士が、八四キロもある生命維持装置や宇宙服を身に着けたとすれば、その合計は地球で

は一六八キロにもなるが、もし六分の一の引力なら二八キロにすぎない。したがって、六分の一の引力の条件を作り出した地球のシミュレーション(模擬実験)では宇宙飛行士とその荷物を地球での正常な重量の三分の一にまで減らす必要がある。地球上で六分の一の引力を作り出そうとすれば、水中か、または人間が上下のいずれに動こうとも実際に人間と荷物を軽くするのに役立つような特殊な装置を用いる必要があるだろう。この方法のいずれもNASAが採用した。しかし一九六四年の初めに宇宙開発科学者は、水または特殊な装置を用いなくても月の仕事場の代用になる場所としてオレゴン州を発見したのである。

オレゴン州でのバカらしい演習

宇宙飛行士たちは「月面上の脚」をつくるためにオレゴン州バンドへ派遣された。まずウォルター・カニンガムが、月面でアームストロングとオールドリンによって使用されることになっていたある道具と、宇宙服、背にかつぐ生命維持装置などを徹底的に試してみた。ところが最初のテストのとき溶岩の上でカニンガムは体のバランスを失って親指をくじいて、服の手袋に小さな穴をあけたので、そのために服の内部の気圧が減ってしまった。ここでは明らかに完全シミュレーションが試されたのだ。そうだとすればNASAの人々は重量の問題をどのようにして合理化できるだろう。こんなやり方で六分の一の引力の条件が作り出せるわけが

ない。たとえ背中の荷物がかなり軽くされたとしても、八四キロの宇宙飛行士と宇宙服の合計重量は、要求される月面の重量の三倍をはるかに超えるだろう。どちらかといえば、そのテストの本当の目的は月の引力が地球の引力とほとんど同じであると想定して実験を行うことにあつたにちがいない。

オレゴン州バンド地域で宇宙飛行士たちが宇宙服を着て全く自由に動きまわれたということは、宇宙服が八四キロよりもはるかに軽かつたということを暗示している。この演習のバカらしさはNASAの隠蔽策をきわめてはつきりさせている。一九六三年の初めにそのテストが始まっているので、月の強い引力が少なくとも一九六二年の初め頃に発見されたことは明らかである。このことは本書の第3章で出された結論、すなわちレイジャリー月ロケットが一九六二年までかそれとももつと早く月の引力を決定する情報をNASAに与えたということを裏付けている。

宇宙服は軽かつた？

初期のアポロ飛行を通じて、アポロの宇宙服はおそろしくかさばって不都合という印象を大衆に与えようとした。このことは月面における宇宙飛行士の動作を妨げることになる。そうなるも飛行士は実際にはハンディキャップをつけられることになり、スポーツ選手のような離れ業を印象づけるのは不可能となるだろう。カニンガムが一九六四年に最上の宇

宇宙服を徹底的にテストしたときから一九六九年に最初のアポロ宇宙船の月着陸までのあいだに、この宇宙服の改良はほとんどなされなかつたということは少々信じがたいことである。大衆はいつも、最上の装備が宇宙飛行士に与えられたと聞かされてきた。たしかにできる限りの最高の装備を開発するために充分な資金が出されたのだ。

ちよつとした^{まぎまぎ}論議によつて興味深い発見が明るみに出た。一九七一年に書かれた『宇宙への適合』の中で著者のロイド・マランは次のように述べている。

「実際問題として、ハミルトン・スタンダード社は一九六八年十月以前に、九三パーセントの実効範囲でもつてすでに宇宙服を完成させていた。その月にペンシルバニア州フィラデルフィアで開催されたアメリカ航空宇宙飛行協会の第五回年次大会に出席した宇宙開発科学技術者の前でそれを公開した。一週間にわたるその総会のあいだ、その宇宙服のままの展示は広く関心と注目を引いたのだが、多少の不信をもひき起こした。見物人に、ふくらんだ宇宙服に大きな機動性をもたせ得ると信じさせることはむづかしいことだつた。だがそのように作られたのだ。というのはアポロの月着陸計画に続く有人宇宙飛行のより大きな機動性の要求を満たすための進歩した宇宙服が開発されたからである。

筆者は主張したい。もし一九六八年の初めにこの服が当時使用できる最上の装備であつたとすれば、NASAはあらゆるアポロ飛行で確実にそれが使用される

ほどの時間的余裕と資金を持つていたはずである。だが結局数十億ドルが月に人間を送るのに使われた。ひとたび人間が月に行けば、宇宙飛行士たちが最上の方法で自分の仕事を遂行できるかどうかを確かめるのは全く筋のとつたことである。もしその服が用いられなかつたとしても、たぶんNASAは月には弱い引力しかないことを大衆に信じさせ続けようとしたことだろう。もし宇宙飛行士たちが口止めされていたら、隠蔽策の中で息をするチャンスは少なくなるだろう。宇宙服のかさばりと重量は貧血を起すようなジャンプと動きまわろうという試みのよい言い訳になるだろう。しかしアポロ16号の宇宙飛行士たちは改良された宇宙服がかなりの柔軟性を帯びていたと指摘されたのだが、それでも彼らは価値のあるジャンプの離れ業は不可能だつた。

その後のアポロ飛行までには宇宙服に改善がほどこされたが大衆は聞いている。ナショナル・ジオグラフィック誌の一九七一年七月号の「円錐型クレーターを登る」と題する記事の中で、筆者のアリス・J・ホールは次のように述べている。「アポロ15号の着陸船は六七時間も月に滞在できるだろう。これはアンタレスの滞在の二倍も長い時間である。宇宙飛行士が雑用で動きまわるときは、より大きな機動性が与えられるだろう」

読者はアポロ11号の宇宙服と16号の宇宙服の各サイズを比較すると、16号の服が見かけ上、かさばりが小さいことに気づくだろう。したがつてアポロ16号の飛

行士たちは、かりに六分の一の引力が存在していたとしても、月面で何らのトラブルも起こさなかつたはずである。各種の丘は飛ぶような調子で登れたはずだし、遠距離も飛行士によつて短時間で行けたはずである。

全然月着陸がやれなかつた不運なアポロ13号の飛行前に、宇宙飛行士のラベルとヘイズはアリゾナ州プレスコット国立森林公園の中のバード谷でトラバースを練習した。これは計画された着陸地点の高度よりも約一二〇メートル高い尾根にある円錐型のクレーターに到達する必要があつたという体験を二人に与えるためであつた。ここで筆者が再度読者に言いたいのは、月の引力が六分の一であるとなれば、アリゾナ州での練習は全く無意味だということである。月面上の彼らの重心は地球のシミュレーションとは違うだろうし、地球での重量は三倍も四倍も強いの、月の条件をつくり出すことはできないだろう。しかしその練習は地球に似た引力の条件をシミュレートするのはたしかに有効だつたろう。

もしカニガムの荷物と宇宙服が八四キロあつたとすれば、彼は数分間で完全にへたばつたことだろうが、そうではなかつた。信じがたいことだが、彼の一九六四年のシミュレーションは宇宙服の気圧の問題を含んでいた。これが意味するところは、彼は酸素とある種の冷房装置を身につけているということである。さもなくば彼は熱の消耗で急速に死んでいたことだろう。こうした証拠のすべては、生命維持装置と宇宙服は、宇宙飛行

士が長時間、月の強い引力のなかで行動できるほどに軽かつたという結論を示唆するものだ。加うるにこれは一九六四年に早くも達成されており、一九六九年までには開発努力によつて宇宙服をかなり軽くしていったと思われるのである。宇宙服と生命維持装置の合計重量は、おそらく三四キロ以下であつたろう。NASAが入手した外国産の軽い金属と最もよく知られた材料がこれを確実にしたことだろう。

難儀な月面の徒歩旅行

月に向かう途中で発生したアポロ13号の不運に続いて、アポロ14号の打ち上げまでに調整などで十カ月遅れが出た。この飛行はフラマウロ高地帯へ着陸するという新たな試みとなるもので、この飛行のハイライトは円錐型クレーターに向かつて二・九キロの「遠足」をすることであつた。

ところが問題が起こつた。というのはこの徒歩旅行はほとんど登り坂のため、宇宙飛行士たちはMET（基準寸法装置運搬車）を交替で引張る必要にせまられたからだ。最初の月面徒歩旅行でルイスは、シエパードとミッチェルが踊るような足どりとカンガルー飛びで動きまわつたと言っている。具合のわるいことに最初の徒歩旅行は彼らをへたばらせたにちがいない。円錐型クレーターへの旅行で彼らは息を切らせてあえいでいたし、心臓の鼓動も早くなつていたからだ。この難儀な状態は八四キロあると思われる

彼らの半硬式でわずらわしい宇宙服と背中の生命維持装置のせいであった。

飛行士の体重、宇宙服、生命維持装置の合計重量が六分の一の引力では二八キロを超えるはずがないということを理解するのは読者にとつて重要である。これが彼らの地球の重量の大部分とはほとんど考えられない。前日、踊るような足どりとカンガルー飛びで動いていた男たちにとつて、小さな丘は恐るべき存在になつたように思われた。もし月の弱い引力が登り坂を歩く宇宙飛行士たちにこのような恐るべき存在になつたとすれば、最上の状態にあると思われた飛行士たちの健康状態はたぶん過大評価されていたのだろう。ほとんど努力しないで急スピードで丘を登る容易さと長距離をトラバースすることについて、宇宙飛行士によるコメントが聞けるものと思われていた。幸いにもアポロ15、16、17号は、月の敵対的な環境や途方もない六分の一の引力にたいして、宇宙飛行士たちを屈服させなかつた。月面車は目的地への道のほとんどにわたつて彼らを運ぶはずであつた。

アポロ14号の飛行士たちが円錐型クレターの南側面が見える位置まで来たとき、シユパードが片膝をついて石を拾い、立ち上がりとしてミツチェルの助けを求めた。目的地までの道のりの三分の二の所で、登り坂を歩くにつれて彼らの脈拍は一分間一二〇まで上がった。以下の情報はこの徒歩旅行に関するルイスの記事を要約したものである。

「彼らのひどい呼吸はヒューストン、二

ユーヨーク、ワシントン、フロリダで聞かれた。それが続くにつれて徒歩はますます困難になつてきた。クレターの縁は近いように思われたが、一同はその方向に意義のある前進をすることができないのだ。登るにつれてシユパードの脈は一五〇に達し、ミツチェルは二二八になつた。二人はしばしば休息した。四時間の徒歩旅行の半分以上をついやした後、シユパードは円錐型クレターの縁までまだ三〇分はかかると思つた。そこでシユパードは、あと三〇分かけても縁まで行くのに充分な時間はないと判断したのである。結局飛行士たちは円錐型クレターには全然到達できなかった。一同は坂を下つて、気味悪いクレターの方へ引き返して岩石の採集をし、それからトレンチを掘るためにトリプレットの方へ行つた。

どうやら二・九キロメートルの遠足はうまくゆかなかつたらしい。宇宙飛行士たちがそこへ到達しようとしてきほど一生懸命に努力しなかつたとすれば、これはそれほど驚くべきことではない。結局彼らは道すがら記録による裏付けとサンプル採集の仕事があつた。地球でならあらゆることを考慮すれば、これは納得のゆく時間量であるはずだ。しかし月面の六分の一の引力なら宇宙飛行士たちは少なくとも時速八キロの歩行速度を保つことができたはずである。もし彼らが目的地へ行く道の三分の二の位置にいたとすれば、時速八キロの割合で六分間でもつて残りの八〇メートルを歩行できたであろう。しかし彼らは三〇分間でもそれ

をなし得ないと判断した。地球でなら、彼らは残りの距離をのろのろ歩いて時間切れに間に合つたかもしれないが、しかしこれは月面でのことで、いわゆる六分の一の引力下とされているのだ。

わざとスローモーション 映画にしたのか

ついに彼らは着陸地点へ引き返して、ALSEP(月面科学実験装置)の装置類をチェックし、それからシユパードはよく知られている六アイアのゴルフのテストをやつた。このテストの目的は、月の弱い引力でボールがどれだけ飛ぶかを見せることであつた。一個のボールは九〇メートル、他のボールは三六〇メートル飛んだと思われている。これに関連した種々の不確実な要素のために、この距離に関して結論を出すのを不可能にしている。しかしこれまでに打ち出した月に「強い」引力があるという証拠は、その打球テストでそれほどの意義のある距離が出るはずはないことを示している。

著者は映画でアポロ14号の宇宙飛行士の一人を観察した。その飛行士はまともな映像されれば完全に正常な状態で歩けたかもしれないと思われる。セミスローモーションで走つていた。その飛行士が地面から高く飛ばなかつたことと、歩行間隔は地球の歩行以上に大きくなかつたことを考えると矛盾が起つてくる。そのスローモーション効果はこの事実を覆い隠すことはできなかったのだ。これは宇宙飛行士の体重が実際よりも軽くなつた

という印象を与えようとして、動作がのろくなるようにわざと映画のフィルムを映写スピードを落としたことを暗示している。スローモーション効果を出せば、被写体は緩慢に着地するように見えるので、大衆は月には弱い引力があるということに納得するだろう。

一九七九年に放送されたアポロ11号の十周年記念のテレビ特別番組で、月面の宇宙飛行士の短い録画を再放送した。筆者は月面のテレビ画面をうんと見たかつたのだが、一時間にわたる特別番組の中でそのフィルム映写の時間は二分足らずだった。もつと悪いことに、その映画は各場面のあいだが多くカットされているようだった。そのため映画は変化が激しくて、宇宙飛行士たちは昔の映画みたいに超スピードで動きまわるように見えた。たぶん他の視聴者も自問したことだろう。「この歴史的な出来事を撮つたオリジナルフィルムをなぜこんなつまらない映し方をするのか、なぜもつと注意を払わなかつたのか」と。かわつてこの番組は月旅行の準備と宇宙飛行士たちの生活面に焦点をあてていた。アラン・シユパードがコメントして、月面の六分の一の引力について力説していた。

不可解な月面車

アポロ15号は宇宙飛行士に月面で遠距離を行かせるために、初めて月面車を採用することになった。ミツチェルとシユパードが月面でトラブルを起こしてからは、この月面車はほぼ必需品となつた。



▲アポロ16号の月面車

アポロ15号はハドレー・アペニン山地域へ行くことになっており、ここで月面車が飛行士たちをかなりけわしい傾面へ運び上げるはずだった。だが月面車があつてさえも、スコットとアーウィンに着陸船から九・六キロの半径内にとどまらねばならなかった。これは故障の場合に着陸船へ歩いて帰れる最大限の距離である。

この月面車なるものは月の六分の一の引力に合わせて作られたと思われていたが、よく調べてみると、これは地球の引力に近い引力に合うような乗物に似ていることを示しているのだ。それは長さ約三メートル、高さ一・二メートル、ホイールベース（自動車の前後輪の車軸間の距離）が二・二五メートル、輪軸が一・八メートルである。車輪は径八〇センチ

で、接地面にはチタンの山形の刻みがある。見たところ地球のタイヤとほとんど変わらない。各車輪は個別に短距離用の電気モーターをそなえており、アポロ16号の場合、最高スピードは時速一七キロメートルと公表された。本書（原書）の写真4はアーウィンと月面車の写真で、バックにはハドレー山が見える。

月の引力を六分の一とすると、月面では科学通信機器を積んだ人間の乗らない月面車は五四キロ以下になる。宇宙飛行士は着陸船の横腹から月面車を降ろし、それを組み立ててから使用することができた。ルイスによると、地球での訓練期間中よりも月面車を降ろすほうが困難だったという。

降ろす作業中に次のような言葉が月か

ら地球への無電で聞こえた。「落ちてけよ」「うまいぞ」「もう楽だ」
 どうやら六分の一引力下でわずか五四キロかそれ以下の重量しかないはずの物体で二人の宇宙飛行士が悪戦苦闘していたらしい。月面車の積み降ろしや組み立ては地球で訓練されていたので、月面のほうがむつかしいということはなかったはずだ。むしろ月でのほうが容易だったはずだが、そうではなかったのだ。

スコットとアーウィンが複雑なネットワークとウェストのついた最新式の月面服を着たことは意味深長である。この服のおかげでターンしたり首をうなずかせたり、ぐるっと回したりできるし、それ以前の宇宙飛行士よりもっと容易に前かがむことができた。したがって月面服のかさばりは、月面車を降ろすときの飛行士の動作にたいするへたな言い訳にすぎないように思われる。残る唯一の可能性は月の強い引力である。なぜなら地球での訓練は機械上の問題や作業の困難さを排除するために行われたからだ。

月面車を扱う際に月で起こると予想された諸問題は、一九六六年に出たローレンス・メイサク著の「月面での生き残り」と題する書物で論じてある。著者によると、弱い引力のために安定性が最もうるさい問題の一つだという。そして重心を低くしなければならぬので、トレッド（輪距）も広くしてひっくり返るのを防がねばならぬと述べている。したがって、ミニサイズの乗物でも荒地上でスピードを出すには約七メートルのホイールベース（前後の車軸間の距離）を必要とする

だろう。しかしホイールベースがあまりに長いと、進行方向の障害物をよけるのがむつかしくなってくる。

メイサクが考えた乗物の車体は、平らな地面上にある場合、九〇センチのクリアランス（車体底面と地面とのすき間）をもつ径約二メートルの円筒型である。地面から一・八メートル以内に重心を保とうとすれば、六メートルのトレッドを必要とする。メイサクは六分の一引力下の荒地専用の乗物を設計しようとしていた。彼の案になる設計は、この乗物ならば岩石にひっかかることもなく、地球式の乗物ならたやすくひっくり返るような引力条件下でも安定を保つことを証していた。

月の引力が六分の一ならば月面車がどのように作動するかを調べるための分析結果が付録Iに出ている。

月面車は月面上で固まっていない砂ボコリや岩石に遭遇した。このタイプの地面ならば普通の舗装道路よりも牽引力は落ちるだろう。月面車は約七〇〇キロの地球重量があった。六分の一引力下ならわずか五八キロの力で月面車を横滑りさせるだろう。したがって時速一六キロメートルの最高速度で進行する場合、半径二五メートル以下のカーブを描くように車輪が回転すれば、その乗物は横滑りし始めるだろう。時速八キロメートルさえも、最小カーブは六メートルとなる。オペレーターは急速な方向転換をしないように極力注意しなければならぬ。急激にターンするとひっくり返るからだ。月面車は特に危険である。宇宙飛行士たち

は月の地面から上方約一・五メートルの位置に重い背のうの生命維持装置を背負っていると思われていた。月面車の座席は地面から約九〇センチにすぎない。したがって地球重量で三八二キロという宇宙飛行士たちの合計重量の大部分はこの上にうまく乗っかっていったのだ。こうして、月面車は、右に引用したローレンス・メイサクの提案による月面車設計基準には従っていないのである。

作動し得る最大の制動力も月面車の月面重量にかかっている。六分の一の引力下では、わずか五八キロの制動力で車輪を動けなくするだろう。この割合ならば時速一六キロメートルで進行する月面車を停止させるのに、ほとんど六秒と一二メートルを要するだろう。これは障害物のない平らな地面なら受け入れられるが、月面には岩石やかなりの大きさのミゾなどがあるので、月面車を傷つけたらひっくり返ったりするのを防ごうとしてそれをよけるひまはないだろう。結局、六分の一の引力下で月面車が月面上を走るのは危険だということは容易にわかるのである。六分の一の引力が存在するとすれば、月面車でけわしい丘を登り降りするのは自殺行為に等しいことになるだろう。このことは月が地球の引力にほぼ等しい強い表面引力を持つという決定的な証拠を提供するものである。

アポロ16号では月面服にもっと多くの修正がほどこされた。そしてNASAは打ち上げを一九七二年三月十七日まで延期したが、これはもっと柔軟性のある服を強化し、ロケットの垂直上昇中の見事

な分離を確実にするために、ドッキング投下装置を作り直すためである。

アポロ16号は宇宙開発計画の実際の発見事に関して貴重な情報を提供した。読者はこの章の初めに述べられたジョン・ヤングのジャンプの離れ業を思い出されるだろう。彼はアポロ15号の改良型の服よりももっと良いと思われた改良月面服を着て行動していた。また読者はこの最新式の服が一九六八年に初めて発表されたハミルトン・スタンダード社のデザインに沿って作られたのではないかとさえ思うだろう。

最初のEVA（宇宙船外活動）でヤングとデュークは月面車を实地で試みた。着陸地点に接近するにつれて時速一七キロメートルに達する最高加速度でヤングが月面車を運転した。ルイスによると、地面はでこぼこで、スピードを出して急角度のターンをやる「グランドプリ」レースで、月面車がどのように作動するかを二人は知っていた。六分の一の引力条件ならこのショーは間違いなく大惨事に遭遇したことだろう。

厳重に監視されていた 宇宙飛行士

月面におけるアポロ16号の初日の終わりに「ホットマイク」事件が起こった。宇宙飛行士たちは自分たちの会話が一般に放送されるシステムで聞かれるかもしれないとわかっている場合、自分のしゃべることについては慎重になれと前もつ

て言われていた。ルイスの記事から引用したこの事件の要約は次のとおりである。「ヤングとデュークは明らかにマイクロフォンがオフになっていると思っていたので、管制センターの一般放送システムによって聞かれていると思った場合は警戒してまともに話し合ったことだろうが、このときはもつとぞくばらん言葉で会話を始めた。そこでヒューストンのセンターはヤングに呼びかけて、君はホットマイク（緊急連絡用のマイク）を持っているのだぞと告げた。ヤングは詫言て、こんな場所でホットマイクを持つのはときとして恐ろしいことだと述べたのである。そこでセンターは、ホットマイクがオンになっていたの知らなかったところをみると、君たちはぜひぶん立派な仕事をやったのだと伝えた」

右の情報からみて、宇宙飛行士たちはヒューストンのセンターによって注意深く監視されていたことが読者にわかるだろう。加うるに彼らは自分たちのマイクロフォンがオンになっているときは大体に自分をコントロールし続けているのである。右の例ではどうやら何かの装置のトラブルでマイクは切れていると思っただけらしい。こうした性質の暴露情報は、単なる一つの出来事とみれば無意味だが、本書に提示された大いなる暴露を示す資料の背景には、このような小さな証拠が大きな比重をもつのである。

チャールズ・デュークは月面で明らかに難儀な目にあっていた。彼は何度も倒れ、つまづいたり倒れたりする彼の姿を写した一連の写真が多く新聞に現れた。

この転倒は月に弱い引力がある証拠として、ニューズ媒体によって実際に流された。だが六分の一の引力ならば物体が倒れるのに約二・五倍の長さの時間がかかるので、デュークは立ち直る余裕が充分にあったはずだ。しかも彼が最も進歩した最新式の月面服を着ていたことを考えれば、こうまでたびたび倒れたというのは驚いた話である。この服は彼以前の宇宙飛行士以上に多くの柔軟性を与えたと思われていたのだ。

アポロ17号の目的地は晴れの海のくぼ地の南東にある山系で囲まれたある谷だった。サーナンとシュミットは月面車を組み立てて乗り込んでから最初の船外活動を始めた。サーナンに関する次の興味深い記事は「アポロの航行」から要約したものである。

「サーナンはひどく興奮したらしいので、カプセル通信者のパーカーが、君の代謝作用率は上がっているぞと警告した。これはサーナンが多くの酸素を使用していることを意味する。サーナンは今生でこれほど興奮したことはないと言って、みんなは落ち着くだろうとパーカーに伝えた。そして無重量状態で自分を処理することに慣れているせいだと言う。そこで天文学者のパーカーは、サーナンが六分の一の引力で行動していると思うと述べた。サーナンの答は次のとおりだ。「そうです。われわれがいる所は……全然」

月の引力に答えたサーナンの最後の発言は、彼がその議論を避けたがっていたことを暗示するらしい。たぶんパーカー

は強い引力に気づいていなかったの、戸惑わせるような質問を發したのだろう。

なぜ大気の測定をたびたびやったのか

アポロ17号の目的の残りは科学実験にあてられた。シュミットは地質学者なので、非常に広範囲の地質研究が多くの月の岩石によって行われた。加うるに、重力計、大気成分検知器、それに地表下に水か氷が存在するかどうかを調べる装置などによる実験も行われた。大気に関する実験はアポロ15号と16号の目的の一部でもあったので、大気の密度は調査する価値があるし、先行したアポロ各号の発見事が異なる位置でそれをもっと測定する必要があることを示したと結論づけるのは筋が通っている。もし月が科学者の主張してきたのと同じほどに真空であるとすれば、何度もくり返して大気の測定をやる必要はなかったはずだ。月は真空状態だという仮説が、月の弱い引力にもとづいているのは興味深い。大気を保つためには、かなりの引力が必要なのだ。こうした概念を心にとどめながら、六分の一引力概念にもとづいた月の大気説を第6章で説明しよう。月には強い引力が存在することも述べるつもりである。

(以下次号)



訳者付記

原著者ウィリアム・L・ブライアン氏は一九四八年十二月十三日生まれ、三十五歳。米オレゴン州立大学と同大学院で原子工学を専攻。民間産業でフリーライターとして働いてきた技術者。宇宙開発における隠蔽事件を科学的に暴露する特殊な能力を持つ。アダムスキーにたいする熱烈な支持者。今後もこの種の書物を書くという。ベス夫人とは一九七八年に結婚。スポーツは重量上げ。日本GAPの活動を絶賛している。

なお今年二月二十二日付で訳者宛によこした書簡によると、去る二月九日、アメリカのABC放送の午後六時三十四分のニュースで、スペースシャトルから宇宙遊泳をやった宇宙飛行士が、「星は全然見えない！」と言うのを聞いたが、これはアダムスキーの「宇宙空間が完全に暗黒なのに驚いた」という記述を強く裏付けるものだという。

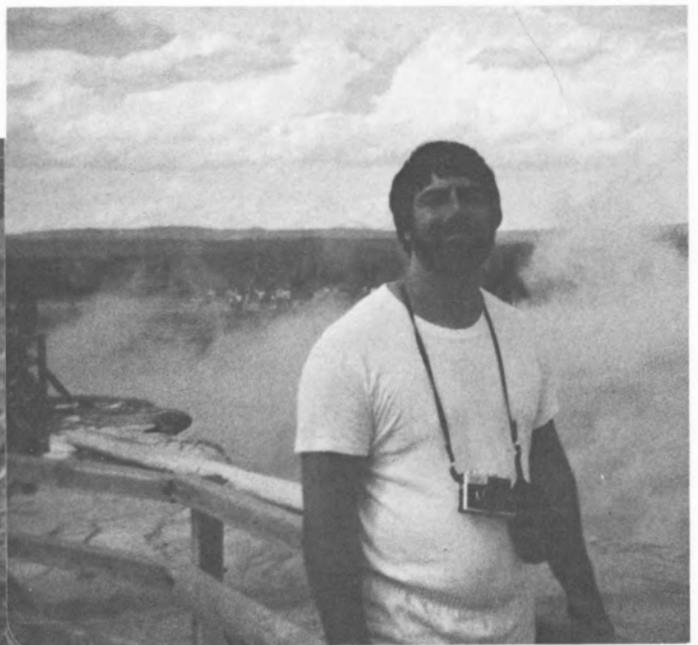
今年度日本GAP総会に招待するので講演をやらないうかという編者の要請にたいして、時間的余裕がないので残念ながら辞退することだった。

『MOONGATE』の英文原書入用の方は本号巻末の広告を見て日本GAP宛申し込まれたい。

なおブライアン氏はもう一人の熱心なアダムスキー支持者であるダニエル・ロス氏を紹介してくれたので、カリフォルニア州ウォルナットクリークに住む同氏に連絡したところ丁寧な書簡と資料を送ってよこした。次号に詳細を掲載の予定。

▶ ウィリアム・L・ブライアン氏

▼ ベス夫人



沖縄のUFO事件

—UFO出現のメッカ沖縄の今昔物語—

〈日本GAP沖縄支部代表〉

新里義雄

この太陽系の地球以外の惑星にも我々と全く同じ姿形をした人間が住んでいるということが大衆のすべてに信じられるようになるのはいつのことだろうか。ましてや現状に照らして、この問題に付随する宇宙の法則の深遠な面への関心を多くの方々に期待することなどほとんどおぼつかないようにも思える。

この問題の啓蒙活動には単なる忍耐力を越えたものを必要としている。それは「信念」である。だがこの意味の信念は各人が単に個人的願望の達成に応用するときに言うあの信念の程度のもではない。最終的に勝利を得るのは「真実」であって、しかも人間は本質において創造主の資質を受け継いでいるのだから、いずれば誰もがスペース・ブラザーズ（友好的な異星人）の伝える深遠な宇宙の法則の概念を受け入れて、放蕩息子のように「父」のもとへ帰って行く道を歩み始めるのだという認識に基づく信念である。私たちは偉大な友人のあの「信念」に習って、それをGAP（知らせる）という活動に応用している。

久保田先生の、この「信念」に基づく忍耐力によって日本におけるアダムスキー問題の今日があるし、機関誌「UFO contactee」は活動家以外にも多くの熱心な読者層を得つつある。そしてこの現象の最も大きな原因は、この機関誌が営利を目的としていないために「ただひたすらに真実に沿う」という姿勢から外れることがないので、必然に他に類のない高貴な輝きを放っているからであろう。まさに本誌は、この世界のこの分野の頂点

に立ち、一般大衆をアジリながら、レベルの向上のために寄与して活動するGAPの顔といえるものである。

右のようなわけで、すでにUFOの出現それ自体は、この分野でアダムスキー問題全般に没頭するわれわれにはさほどの驚きでもないのだが、読者層が広がっ

〈その1〉アフリ嶽上空の円盤群

地理的な数字に詳しくなく、そのために正確な位置を示せないことを大変申し訳なく思うのだが、まずは世界地図を広げて北緯二六度と東経一二八度との交点の辺りを凝視して頂きたい。初めその辺りに島の存在を確認することは出来ないかもしれないが「沖縄島」という文字だけは難なく目につくだろう。四千万分の一の地図ならば、かすかな黒い点にしかならないほどの小さな島、これが沖縄である。赤道近くにある亜熱帯の島である。だが「真実それ自体」は場所や大きさという条件を必要とはしない。それはどこにでも存在するし、存在することができ

偉大な尚真王

ところで、この沖縄島の歴史の中の一つの気になる伝承がある。

一四七七年のことであつたと申し上げれば読者は、なんだ五百年も前の事かと興味を半減させてしまうかもしれないが、ともかく紹介しよう。この事件には単なる伝説に見られない真実と他の何かがあ

てゆくのに伴い、やはりUFO現象を紹介し続ける必要があるだろう。

したがって次に紹介する二つの事件は、活動家の皆様へというよりもむしろ愛読者の皆様へというのが筆を取った主な動機である。

るからだ。なにしろ謎の物体の突然の出現という出来事が、この沖縄島の過去の歴史において突然の王位交替という一大ドラマを招く事態に発展したからである。沖縄はわずか一世紀前（一八七七年）までは一応独立王国であつた。しかもこの時まで神託政治が行われていたのである。そして歴史研究書等によると独立王国時代の琉球は中国や遠くは東南アジア諸国との貿易が盛んに行われていて、織爛たる文化を持ち、栄華を極めていたという。この点に誤りはないと思うが、これも表面上だけのことにはすぎなかつたのであつて、一方の民衆の暮らしは貧困のどん底にあえぐ状態であつたようだ。

だが、その年（一四七七年）の二月、貧困にあえぐ民衆に一条の光明がもたらされようとしていた。その光明とはまさに琉球の歴代の王の中でも最も偉大であつたといわれる尚真王の突然の即位がなされたからだ。そして何とこの突然の即位は、今に伝えられる謎の物体の出現に端を発するものだったのである。この王位交替劇のいきさつをお伝えする前にまず尚真王がなぜ偉大であつたと

いわれるかを知って頂くために、彼が残した数々の業績の中でも最も宇宙的な業績と思われるものの一つだけを紹介しよう。

殉死の風習を廃止

琉球王国は舜天(しんてん)王統(一一五三年頃)にはじまり、英祖(えいそ)王統、蔡度(さいと)王統、尚思紹(しうしやう)王統(第一尚王統)を経て、一四七〇年には尚円(しやうえん)王統(第二尚王統)が起り、この王統が後四百年間続いている。

ところで過去にあつては、世界のいくつかの国家の中に殉死という残酷な風習があつたことを我々は知っているが、この蛮風は沖繩の歴史にもあつたのである。沖繩におけるそれは第一尚王統(十五世紀)の初代王であつた尚巴志(しやうぱし)の代から始まつたものだといわれているから、およそ百年間続けられていたということになる。

ご存知のように殉死というのは君主や族長などが死んだ時に家臣や召使いが生き残つたまま王の死体とともに墓穴に閉じ込められて餓死させられるという残酷野蛮な風習である。これが琉球では実に一五〇五年といふごく最近まで続けられていたというのだから驚きである。そしてこの年(一五〇五年)、この蛮風を禁止したのが、まさに偉大な王の名にふさわしい尚真王その人だつたのである。即位後三十年、彼が四十四歳の時であつた。

尚真王が殉死の風習を禁止した動機については次のような言い伝えがある。父である尚円王がこの世を去つたのは

尚真が十三歳の時であつた。その遺体が城に隣接する玉陵(たまら)に葬られた時にも例外ではなく、その時は男女合わせて三十人が犠牲になつたという。この人たちが墓の中で号泣する声やすり泣き、あるいは悲鳴は、どこかのすき間から外に洩れて王宮までも聞こえたという。これが幼い尚真の胸にどのような響いたかを想像するのは困難ではない。この時の尚真はわずか十三歳である。そしてこの筆舌に尽くせない耐え難い体験が、後に自分が王になつた時に、この残酷な風習を禁止しようと決心させたという。

色光を放つ物体群

さてそれでは次にこの劇的な王位交替劇のいきさつに話をもどすことにしよう。

一四七七年二月のある日の早朝、沖繩本島最北の地、辺戸(へんと)のアフリ嶽(あふりがき)という山の上空に飛行機の落下傘のような物体が数個出現した。物体から放たれる色光は五色鮮やかで、その大きさは遠方の村々から眺めればはっきり確認できる程であつた。所は中央の首里王府から遠く隔つた地である。これといつて天下の一大事といえるほどの事件が起こるはずもなかつた。静かな山村で突如として発生したこの光景に、辺戸をはじめ付近の村々はハチの巣をつついたような騒ぎとなつた。

人々が口々に叫ぶ。

「神様が天降り遊ばしましたぞ！」

「どれどれ、どこだ!？」

「見ろ! アフリ嶽の上だよ!」

「ああ!」

▼〈図1〉アフリ嶽上空に出現した謎の物体に驚く人々。



「チビラーサツサーノ(きれいだノ)」まぎれもなくそこに浮かんでいるこの異様な物体をまのあたりに見る人々は、この神(?)の威厳に満ちた有様に思わず地にひれ伏さんばかりであった。驚きの叫び声とともに上空を見すえたままの人々は、泣き出しそうな調子でそばの誰にともなくささやく。

「神様はいつおいでになったんだろう?」「夕べだよ。昨日の明るいうちは何もなかったんだ。きつと私らが寝静まった後に天から降りて来られたんだ」
「ああ、ありがたや、ありがたや」
こう言つて人々はその異様な物体に向かつて手を合わせるのであった。

こうして辺戸の村々はもちろんのこと、この出現の噂は次から次へと伝わり、たちまち島全体に広まっていた。もちろん、この事件の有様がまつ先に伝えられたのは首里王府であるが、この突如の天神(?)の出現に騒然となった後、冷静さをややとりもどしたときに人々が気付いたのは、差し迫つての責務はこの事件を一刻も早く首里王府へ伝えることであつた。それというのも、これと同じ物体の出現は今回が初めてではなく、尚真の父である尚円王が即位していた一四七三年の三月九日にも同じようにして出現し、首里城を訪れたその時のノロ(女神官)が尚円王の即位を祝賀するオモロ(神歌、預言)を歌つたと語り伝えられていて、そのためにこの謎の物体は新王の代になると一度だけ出現して、その即位を祝賀するものと信じられていたからである。しかも前回に出現したときのそれは辺戸

から首里城までの距離(約百キロ)を一瞬にして移動したので、人々は今回もこの神様は同じようにして首里城へ移動するものと思つたのであつた。

ところで、神託政治が行われていた当時の琉球では、最も神格の高い神を、「キミテズリ神」と呼んでいたが、人々はこの謎の物体の出現をキミテズリ神の出現として信じていた。そして伝承の中でこの物体は「アフリ傘」とも「涼傘」とも呼ばれている。「涼傘」とは中国の皇帝が使用した、それこそ落下傘のように大きな房のついた傘のことである(図2)。

ちなみに当時の琉球のノロは皆、この「涼傘」を小さくしたものを所有していたようだ。中国から伝えられたか、あるいはあの謎の物体のように似せて独自に作ったのかもしれない。そしてノロとしての威厳を示すのに使用されたのだろう。辺戸からはただちに飛脚が走つた。当時はすでに飛脚制度が出来ていたのだ。

〈図2〉涼傘(りゃんさん)
下に房がたれている。



馬を持つ飛脚は馬を走らせたであろう。こうして伝承からすると、この報告はその日の昼過ぎか、遅くとも夕方には王府へ届いたものと推察される。というのも翌早朝にはこれを知らされた島中のノロ全員が首里城正門前に集合しているからである。驚くべき早さである。

一方、この知らせを受けた王府では前例もあるためにこれが当然、尚宣(きん)威王の即位を祝賀するための大神(キミテズリ神)の出現だと受けとめて、城内はたちまち緊迫した異常な雰囲気包まれた。

ノロたちの奇妙な行動

首里城正殿の正門入口である奉神門に通ずる道に涼傘で頭を覆つたノロたちが一列にずらりと並ぶ。その数三十余名。上半身を涼傘で覆つているので互いに隣りの人が誰であるかはわからない。一名のノロの他、だれも自分がリーダーでないことを知っているだけである。誰かがノロに扮してこつそりとその列にまぎれ込んで気付かれなかつたであろう。

ところでキミテズリ神というのは天神すなわち天界からの使いであつて人間ではない。したがつてそれに扮するのはこの女神官たちであつたのである。

こうして神に扮した女神官たちが首里城で一堂に会し、重々しい調子で一斉にオモロを歌う様は莊厳で、一種身の毛のよだつような異様な雰囲気包まれたといふ。

こうして大神の出現(?)に伴うといふ、まれにしかない神託の儀式が始める。

れた。ところがここで異変が起きた。前例からすればノロたちは後宮から出て正門前に現れ、王の玉座に向かつて並ぶのだが、今回は玉座を背にして並んだのである。

この異例の光景を目のあたりにした宣威王や側近の者たちは何かを直感して不安に顔を曇らせた。

不安が的中した。オモロが歌われ出すと、それは王の即位を祝賀し賛美するものではなく、側にひかえている十三歳の幼い尚真を賛美するものだったのである。

「首里にいます王(尚円王)の愛子が遊び踊る姿はみごとであるよ云々」と。

これは宣威王が完全にキミテズリ神から見放されたことを意味した。この時宣威王は愕然となり、色を失い、たちまち顔面蒼白となり、手も足もわなわなと震え出し、無言のまま王宮内にひっこんだという。そしてその後、日ならずして重臣を召集すると「われは神に見放された故に退位する。後のことは良きにはからえ」と退位の声明を行った後、玉座降りて後宮へ姿を消した。王位についてわずか一年足らずであつた。かわつて王位を継ぐこととなつた尚真が十三歳の時の越来に隠退し、六カ月後の八月には世を去つていた。

王位交替のために出現した?

最後に、この前代未聞の王位交替劇の直接のきっかけとなつた謎の物体の正体

がいったい何であったかを考えて頂きたい。

しかしその前に、これが事実に基づく伝承であるか否かが、まずは問題となるところだが、これも伝えられている内容からすれば、そこに描写されている物体のあまりにもリアルな表現からして、この伝承は「真実」に基づくものであるとしか考えられないのではないだろうか。

さらにこれが権力争いに利用された作り話であるとも考えにくいし、作り話であったという証拠も見当たらないのである。

物体の形といい、空中に浮かぶ様子といい、移動する速さといい、放たれるさまさまな色光といい、イオン化された空気による雲を表現したと思われる房といい、それはまさにUFOすなわち空飛ぶ円盤に酷似してはいないだろうか。作り話が偶然にUFOに酷似してしまったのだとは、ちよつと考えにくいのである。

次にこの謎の物体は何の目的で出現したのかという事を考えてみる必要があると思うが、わかっている事実は、この物体の出現が直接のきっかけとなって王位が交替するという一大ドラマが王宮内で繰り広げられたことである。そして、これによって新王となった尚真が、民衆に對しても可能な限りの光明をもたらした王の中の王で、殉死を禁止した業績は当時の社会に宇宙的、進歩的な改善のきっかけとなったことも事実である。どうも彼等友星人を想わざるを得ない事件ではないか。

この宇宙の訪問者は、出現して目撃されるという以外にその後は何の干渉もし

なかつたようにも思える。「人間は各々が他からの押しつけではなく、自ら目覚めてこそ、個人の宇宙的向上がある」という法則性に基づいている彼等とすれば、出現して目撃されることのみで終わるのが彼らの可能な限りの援助であつたのだろう。

〈その2〉 宜野湾市にUFO着陸!?

一九七七年に沖縄の宜野湾市にUFOが出現した事件は、それが目撃されたというばかりではなく、写真こそ撮られなかつたものの痕跡を残して出現の裏付けを与えたという、まれに見る事件であつたために、同年七月十三日付の琉球新報の朝刊でも報道されたし、某UFO専門誌でも紹介され、また日本テレビからの取材もあつたというから、読者のなかにはこの事件をすでにご存知の方もあつたと思う。

筆者がこの事件を知つたのは東京にいる時であつたが、某誌に紹介された記事と写真にある現場が筆者のよく見慣れた場所であつたのに驚いた。それでこの事件を身近に感じたことを憶えている。それは筆者がアダムスキー問題に出合つて後二年目頃であつた。

そんなわけで身近に感じる事件として、また着陸したらしい痕跡の残るまれな事件として筆者独自の立場で調査してみたと思ひながらも、とうとう七年の歲月が流れて今日に至つてしまつた。

砂糖キビ畑の怪現象

空中に浮かぶアフリ傘(神)の出現というのが、作り話であつたという証拠がどこにもないということからして、筆者の推察が突拍子もないものと思われたとしても、少なくともそれは許されてよいはずである。

砂糖キビ畑の不思議な現象と上空に出現した謎の光体を目撃したのは、宜野湾市宜野湾三十九の二番地に住む玉那覇さんご夫妻である。

ご主人の正幸さん(当時三十歳)が自宅の裏にある砂糖キビ畑に怪現象を見たのはその年の七月八日の朝の出勤前であつた。ご夫妻とも公務員である。普段であれば朝の忙しい時間に裏の畑の事など気にもかけないのだが、その日そこに氣をとられたのには理由があつた。

その日の早朝、目が覚めたばかりのご夫妻は周囲の静けさの中で裏の砂糖キビ畑に突然ガサガサツツという、かなり広い範囲でキビの葉がこすり合うようなざわめきがするのを耳にした。何だろう?と思う間もなく、今度はゴーツツまたはブーンといった感じのかすかな海鳴りのような音がした。その音は数秒間続いたあとで消えたが、正幸さんがキビ畑に目をやつたのはそれが氣になつていたからである。

見るとキビ畑の中央には明らかに人工的な、はつきりとした丸いくぼみがある。所にちらばつて作られていた。畑の面積

の広い部分に一つと、残る二つはこれから一五メートル程離れた面積の狭くなつた所に並ぶようにしてあつた。この時正幸さんは不審に思ひながらもそのまま仕事に出かけているが、奥さんの孝子さんはそれに氣付いてはいない。戸締まりのために玄関へ出るのが後になつた孝子さんが、カーテンをしめるときにそれとなく目に映つたキビ畑に異常はなく普段のままであつた。すなわち丸いくぼみのある部分は視界に入らなかつたのである。ところが孝子さんは後になつてこのキビ畑にまつたく妙な現象を発見して腰を抜かさんばかりに驚くことになる。

ご夫妻は共に公務員で、正幸さんは役所勤めで孝子さんは郵便局勤めであるが、その日は土曜で半ドンである。

孝子さんが帰宅したのは三時四時頃であつた(七年も前のことなので、はつきりした時間はもう憶えていない)。玄関入口の階段の踊り場上がったとき、自然に視界に広く入るその砂糖キビ畑に見た怪現象は、思わず息をのむばかりの異様であつた。砂糖キビが、周囲だけはきれいに元のままに直立して、中の部分はまるで大きな一つのセンペイのようにひれ伏していたのである。本人の言葉を借りれば「ペターツツとなつて倒れていたんです。中の方だけよ、周囲はきれいに立つていたので、孝子さんという事になる。そしてその日の夕刻、孝子さんはまた息をのむような体験をすることになる。けつして飛行機ではないと本人が断言するオレンジ色の光体が上空で妙な動きをするのを数分間目撃したのである。

こうしてこの事件は、一時期は世間の注目を集めたのであるが、現時点に至っては筆者の調査に十分な手掛りとなるものは残っていない。したがって出来る事はご夫妻にお会いして詳しい話を聞かせて頂く以外になかった。そしてやはり着陸したという決め手になる何も得ることは出来なかつたものの、しかし新聞や某誌の調査でも知られていなかった驚くべき新事実を発見した。さらにこの事件で発生する一連の現象に慎重な考慮をほらううちに、あの時の事件がスペース・ブラザーズによるものではないかという有力な要素を見出すことになったのである。

ウズを巻きながら静かに倒れていったキビノ

あらかじめ約束してあつた三月六日の日、友人の三重野氏を伴って玉那覇さん宅を訪問したのは夜の八時丁度であつた。応接間へ案内されて驚いた。この部屋の二方の壁はすべて本棚で占められていた。そこには沖縄の歴史資料がびっしりと並べられている。沖縄の古い文化を発掘するのが好きで、有志を集めて「ガジマル会」というグループをつくり、かなりつつ込んだ研究をなさっているらしい。そのため一時はその面の話になつたが、いよいよかんじんの事件のことに話題を変えると、いきなり意外なことを話し始めた。

「あのキビ畑の怪現象は中央にあつた丸いくぼみに始まつて、しだいにウズを巻くようにして静かにゆつくりと倒れてい

つたんです！」
「ええっ！ いきなりあんな状態になつたのではなかつたんですか!？」

筆者は思わず大きな声で聞き返した。新聞や某誌にもキビは確かにウズ状の向きになつて倒れていると伝えられてはいたが、しかしそれはいきなりそんな状態になつたというように伝えられているのである。

「いいえ。ゆつくりゆつくりと四、五時間を要して倒れていって、しまいにあの状態になつたんです。」

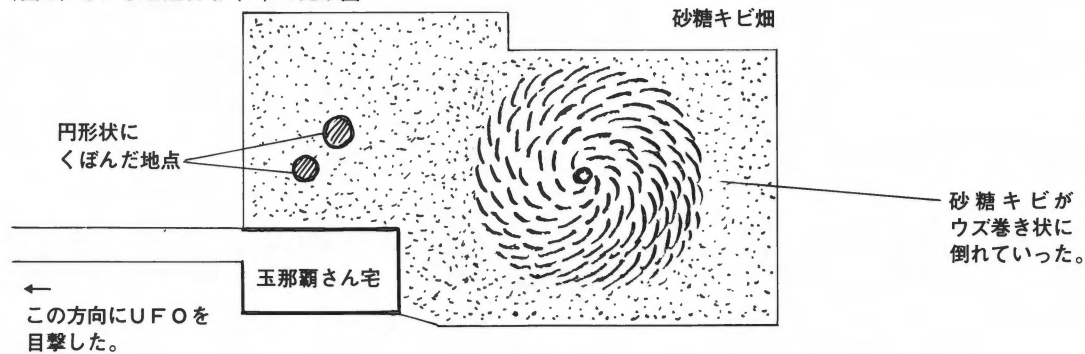
筆者が呆然となつて相手の顔を見つめてみると、確証を与えるように無言でうなづく。このことは奥さんの孝子さんも今初めて聞かされたらしい。まさか！とこつた表情でご主人の顔を見ている。

ここで筆者はすつかり考え込んでしまつた。てつきり円盤が着陸したために押しつぶされてそうなつたんだらうと思つていたのに、彼のこの話からすると、筆者は自分の誤つた先入観にすつかりやられてしまつていたことになる。

考え込む私にはかまわず、彼はテーブルの上で指を動かし、円を描きながら、しだいに円を広げて「こんな風にして広がつて行つたんです」とその様子を説明する。

何ということだろう！ 筆者はこんな現象を見たことも聞いた事もないが、その様子が目に見えるようで、内心は興奮状態である。妙なざわめきと音があつた……丸いくぼみが三方所に出来ていた……その中の一つがひとりでに段々と大きくなつていった……まるでそのくぼみ自

〈図3〉 UFO着陸現場(?)の見取図



▼左は円形状のくぼみがあつた広場 (現在は消滅)。左の建物は玉那覇氏の住宅。右は問題の砂糖キビ畑。



体が一つの生き物のように……。円盤の放射エネルギーのなせる業か？ 興奮気味のなかでこんなことを考えざるを得ない。

少しの沈黙の後でなおも尋ねてみた。

「見ている目の前でそうなっていたんですか？」

「いいえ。それを見続けたというわけではありません。ただ、そうとしか思えないんです」

「残りの二つのくぼみはどうなっていたんですか？」

「その二つも最終的には初め私が見たときよりは少しは大きくなっていたんですが、この二つは広がらなかったんです」

こうなるのと彼の推理は確かに正しいと思える。ご夫妻が朝勤めに出かけたあと、奥さんの孝子さんが三時か四時頃に帰宅して、その第一発見者となるまでの間に、このキビ畑に何者かを見たという人は一人もいない。しかも付近には住宅がたくさんあるし、国道沿いになっているから車や人も多い所である。それは確かに約八時間ぐらいの長い時間をかけて広がっていったと考えられる。

「倒れ方の程度はどうだったんですか？」

「まるでトロツとなつて倒れていったのではないかと思えるように、ベターツと根元から切つて倒してあるような倒れ方だったんです。穂先がみんなウズと同じ方向へ向いているんです」

「根元に異常はなかったんですか？」

「いいえ。中へ入って調べて見たんですが、別にこれといった異常はありませんでした。根はちゃんと普通に土の中にあ

るんです。しかも一本も逆方向へ倒れているのはありません」

当時の騒ぎの中で、竜巻きの仕業ではないかという意見もあったそうだが、様子からしてこれが竜巻きの仕業でない事は明らかである。

この異常な様を見て付近一帯の人々もただ頭をかしげるばかりであったという。市役所の農地課のスタッフ全員も見に来たのだが、原因が全く解らなくて、しいには肥料の与え過ぎではないかと言いつた人もいたという。だが正幸さんに言わせれば絶対にそんな事はないという。肥料の与え過ぎが原因だとすれば、周囲だけがきれいに立つて、中の方だけがなぜ一日経過する間にあんな倒れ方をするのだろうかといつて否定した。筆者もある種の農作物に肥料を与え過ぎて枯らせてしまったという話を耳にした事はあるが、こんな状態で倒れたという話は聞いたこともないし、あるはずもない。しかもこの畑のキビはその後身を持ちなおして成長を始め、ちゃんとした状態で収穫されているのである。

異様な飛び方をするUFO

「その日の夕方だったんですね？ いわゆるUFOを目撃なさったのは？」

「答えたのは孝子さんである。ご主人はUFOを目撃していない。不在だったのである。」

「そう。六時か七時頃だったの。はつきりした輪郭はなかったんですが、丸い玉のようなオレンジ色の光でした。ポーツ

とした輝きでした」

「どの辺りに現れたんですか？」

「あの二階家の上の方です」

「そう言つて指差したのはこの家の南側、庭先を二〇メートルばかり隔てた真向かいの建物である。ちなみに、この応接間も二階になっているから、隣の二階建がさほど視界のさまたげになる事はない。」

「しかもずいぶん離れた所にある。」

「大きさはどの程度ですか？」

「五〇センチ位に見えました。見たこともないものでしょう。もうびつくりしました」

なるほどその日は早朝から始まつて午後には裏（家の北側）の畑の異常現象で、夕方にはUFOの出現である。変な事ばかり起こる日だと、不安もあつたことだろう。

「あの二階家のどのくらい上に見えたんですか？」

「そんなに高くはなかったのですが、あの辺りに」

「そう言つて示した迎角はだいたい五五度。ちなみにこの家もゲタ履き造りの二階になっている。」

「あの建物の真上だったのですか？」

「いいえ、ただあの建物の上の方に見えたんですが、遠い所であつたか、近い所であつたかは解りません」

「ここまでは孝子さんの話であるが、ここまでお聞きして、その物体の大きさは実際はどれくらいだったのだろうと考え、側の三重野氏とそれに関する意見の交換をしていると、奥でテレビを見ていた子供さんたちの事が気になったのか、

孝子さんは席を立つて行かれた。そこでかつて話し始めたのは主人の正幸さんである。だが正幸さんは直接UFOを見たわけではない。その時は不在だったのだから。したがって次の事は奥さんの孝子さんから聞いたことを正幸さんが代弁している。

「あの辺りに出たり入ったりしていたんです。」

「出たり入ったりですか？」

「ええ、そうです」

「どういふことですか？」

「こういうふうに見えて、こういうふうに入るというようにです」

現れた方向へ指を向けて円を描くようにしながら説明するのだが、出たり入ったりという表現が何を言わんとしているのかどうも解らない。もしかするとこの人はUFOという物を、ちまたの一部の人たちによる盲説の、UFOはいわゆる異次元から出現するというふうに受け止めているのだろうか。少々がっかりしたが、これはあたかも出たり入ったりするかのようだというこの意味だろうと考え、気をとりなおしてから、現実にごんな状態であつたかだけを説明して頂こうと、なおも説明を求めた。自分も相手にまねて円を描きながら、

「つまりこういうことですか？ こうして円を描きながらこの円の上の約半分の間は輝いて、下方の部分では消える、すなわち、輝きが全くないということですか？」

「そうです。ぐるーっと回りながら、この辺りでは消え、そしてまたこの辺りか



▲玉那覇正幸氏(左)と筆者・新里義雄氏

ら輝きが現れ始めるといふふうです」
「なるほど、それにしても長いですね。」
一日中ご家族につきまといていたような
……」

こうしてこの物体は三、四分の間に同
じ回転を四、五回くりかえしたあと雲の
中に飛び込むようにして見えなくなつた
という。このとき飛び込んで行った雲も
普通の雲ではなく、UFO自体がその放
射エネルギーによつてそれ自体を包んで
あつたのかもしれないが、孝子さんの目

には普通の雲のようにしか映らなかつた
ということになるだろう。

一時間という約束した時間の経過はあ
まりに早かつたが、最後にUFO自体は
光そのものではなく、そのパワーの増減
によつて、それを包む周囲の空気が様々
な色に輝くのであつて、UFO自体は地
球の飛行機のように固型物であること、
それは空間に浮かぶ地球が時速三千マイ
ルの速度で宇宙空間を進行しているが、
その表面の我々人間は何ともないのとお

なじに、この地球の存在原理と同じ原理
に基づいて造られていることなど、その
他をお伝えしてから、「宇宙からの訪問
者」をさし上げて、おいとしました。

真相はこうか

この調査をする前に筆者は、某誌に紹
介されていたように、「あのキビ畑の異常
現象はUFOの着陸によるものか？」と
半信半疑ながらも考えていた。そのとき
も、その後の調査でも、現場を目撃した
人がいないからである。それでも、やは
り着陸したのだろうと一応は思ってい
た。

ところが、自ら調査した事件の経過を
たどることと、新聞や某誌に述べられて
いなかったところの「その現象は中心か
ら始まって渦を巻くようにしだいに広が
つていったのである」という推理を働か
せて、次のような状態が真相だろうと考
えるに至つた。

現場からわずか一キロ程の北側には、
核兵器が隠されているという噂の絶えな
い米軍の普天間空軍基地がある。この事
件が起こつたときに対する私の推理
は次のとおりである。

円盤から、地球の軍事偵察用の無人小
型円盤が数個発射された。三個だけだつ
たかもしれない。それらに何かの原因で
故障が発生したが、それらはかううじて
基地を離れた現場の砂糖キビ畑に落下さ
せられた。三個がそれぞれ別な所に落下
したために、そのガサガサという音は畑
の広い範囲から反響してかなり大きな音

として聞こえた。時は早朝である。

はるか上空の円盤内では回収可能かど
うかを考えている。辺りには外へ出て空
を見上げる者など一人もいない。窓から
外をながめている者もない。誰もが覚
めやらないボーッとした目をしている。
米軍基地のレーダーに映らないのは当然
だ。回収しよう。

こうして円盤が下降して現場の上空ま
で来ると、そのエネルギー音が遠くから
聞こえてくる海鳴りのように響く。玉那
覇夫妻はこれを聞いた。円盤はさらに下
降して砂糖キビの高さスレスレの所で停
止する。この際に発せられたパワーがい
ずれかの影響を与える。円盤から三人の
乗員(?)が地表に降りる。そして彼ら
三人は偵察機を各々一機ずつかかえてす
ばやく円盤にもどる。その場を飛び去り、
この回収作業は目撃者なしに成功する。
だが円盤のパワーが砂糖キビ畑の広い範
囲に影響を与えたことを彼等は考える。
ガキガサという音も聞かれた。海鳴りの
ような音も聞かれた。そして砂糖キビに
異常現象が起きた。おぼけの仕業か、い
わゆる超常現象だと考えられてはかわい
そうだと、「我々がやったのだ」と知らせ
てあげよう。おわびをも兼ねて……。

こうして夕方になつて再び雲に包まれ
た円盤から小型円盤が発射され当時に
目撃されたのであろう。「下の方では目
撃されなかつたけれど、上の方では目撃
されます」ということを知らせるために
円を描いて、円の下半分では見えなくし、
上半分では見えるような操作をくり返す
ことによつて――。

(世界のミステリー)

-2-

9,600メートルの 高空から落下して 助かった女性

久保田八郎

ドローンノ

ものすごい爆発音が鳴り響いた。カミナリか？ 驚いて家を飛び出て空を見上げる村人たち。だがチェコスロバキアのボヘミア山岳地帯は晴れ渡って雷雨の気配はない。

人々は、はるかな高空に一機の旅客機を認めたが、異常はなさそうだった。

続いてまた爆発音ノ——やがて機体の残骸と焼けた死体が雨のように降ってきた。曲がった金属片や犠牲者の肉片が数マイルにわたって森林地帯に散乱する。

雪に覆われた山の斜面に機体の尾部が突き刺さっている。ヘンケという猟区管理官がまず先に現地へかけつけた。

一九七二年一月二十六日の昼すぎ。あたりは一面の銀世界。狭い山道をあえぎながら彼は尾部が落ちた現場へたどりついた。

「こりゃひどいノ みんな死んじまったのだなノ」

目もあてられぬ惨状を見渡しながらヘンケはつぶやいたが、瞬間、ギョツとし

た。なんと女のかすかな呻き声が聞こえるではないかノ

「おつ、生きてるのかノ」

急いで近寄ってみると、雪の中に黒い制服を着た若い金髪の女が、息もたえだえに横たわっている。

動かしてはいけないノ 賢明なヘンケは女の体に手を触れないのでぞき込んだ。意識不明らしい。コートを脱いで、そつとかけてやった彼は、一目散に山を降りて行く。

一時間後に救助隊が到着して、女を村の病院へかつぎ込み、ミロスラフ・ランダ医師の手で三時間にわたる手術を行った結果、一命をとりとめた。

二十三歳のスチュワード、ベスナ・プロビックはまもなく意識を回復した。自分の名前とフライトナンバーをとぎれとぎれに告げる。

飛行機はストックホルムとコペンハーゲンからベルグロードへ飛ぶユーゴスラビアの定期便で、機体はDC19。

急報により翌日ベルグロードから急行した母親が涙の対面をする。母親はドラゴスラフ・アダモビツク医師を伴っていたので、ランダ医師と協議した結果、ベスナをヘリコプターでプラーグの病院へ運んで大手術を受けさせることにした。

プラーグでは医師団が彼女の脊髄を圧迫している椎骨の一片を取り除いた。手術は成功し、ベスナは徐々に快復した。

だが彼女は九千六百メートルを落下した状況がどうしても思い出せない。この恐怖の墜落は記憶の中でプランクンになっているのだ。医師団は記憶喪失を喜んだ。

もし思い出したら本人は大ショックを受けるだろう。

なぜ墜落したのか？

調査団がボイスレコーダーやフライトレコーダーなどを調べた結果、原因が判明した。最初の爆発は貨物室に何者かが仕掛けた時限爆弾によるものだった。パイロットと一人のスチュワードが話している際に爆発が発生したことを装置が記録している。それまで機内はすべて正常だった。

二十二名の乗客と四名の乗務員全部が死んだのに、なぜベスナだけが助かったのか？

乗客の多くは機内の気圧が急激に低下したために酸欠で死んだ。全員の遺体が座席ベルトをしめたままなのだ。

ベスナの断片的な記憶をつなぎ合わせ、調査団は主要次のように推測した。爆発の直前、乗客に食事をくばろうとしてベスナは通路に立っていた。

最初の爆発が発生してから機体が飛散するまでの短時間、乗客は呼吸困難におちいって悲鳴をあげた。ベスナは客たちのために次々と酸素マスクを引き出した

が、最後へ移動して尾部の所まで行ったが、最後に自分のマスクを顔にあてた瞬間、燃料の爆発で尾部が機体から吹き飛び、彼女の体は尾部の内側の隅に打ちつけられて気を失った。このため彼女は尾部の一隅に乗った状態で、リラック

スしながら「落下したのである。

尾部は山腹へ落ちたが、大きな針葉樹の森林がクッションの役目をして大破せ

ずにすんだ。しかし、はすみで彼女は降り出されて雪をすべり落ちたため、これが第二のクッションとなった。

爆発、酸欠、九千六百メートルの落下、墜落の衝撃などを経て助かったこの美人スチュワードの名は、人間の肉体が偉大な耐久力を持つ実例として医学史に残されている。

だがもう一つの重要な要素を見のがすわけにはゆかない。爆発後、酸欠状態で彼女はわが身をかえりみずに乗客たちに酸素マスクを引き出してやりながら尾部まで移動した。この献身的な行為が奇跡的生還の要因をなしているのだ。偶然に助かったとは思えない。

DC19には筆者も何度か乗ったが、きわめて安定のよい優秀な中型機との印象を得ている。通常なら墜落事故はまず発生しないのだが、爆弾を仕掛けられればどうしようもない。

飛行機の墜落事故は飛行百万回に一回の割合で発生するにすぎない。したがってよほど運の悪い人でない限り事故死することはないとすることも知っておく必要がある。地上の乗物よりもはるかに安全なのだ。ベスナの飛行機は百万分の一に相当する悲運の旅客機ではない。故障ではなくて人為的な事故であるからだ。

なお筆者は「危険をのがれる特殊なカルマを持つ人間」であり、筆者が同行する旅行は絶対に安全であるから、GAP企画の海外研修旅行には安心して参加したい。この記事を読んで恐怖心を起こすことは禁物である。

河口で愛娘のために思念する父親に
スペース・ブラザーズがこたえたのか!?

テレパシー送信と

奇跡的治癒



鈴木謙次郎

鈴木謙次郎氏（五二）は静岡県磐田^{いわた}市在住の日本GAP会員。神経の損傷で半身不随になった愛嬢の難病を治したくて、天竜川の河口で一年近く毎日スペース・ブラザーズにテレパシーで想念を送り続け、ついに奇跡的に全快したという感動の実話である。

約十年前に私は書店の経営を始めましたが、それまでは家畜の飼料を売る商売でした。養鶏や養豚業がしだいにすたれてきたために思いきって本屋になつたわけです。するとそれまで知らなかつた本や雑誌などを扱うようになり、こんな本があったのかと驚くこともありました。そのうち私の店に来るお客さんのなかに岩崎さんという方がおられて、この方

庭のために、寝ている娘をおいて外出できなくなり、しばらく静岡支部の月例会にはごぶさたしていました。娘がまった歩けなかつたのです。家内とは離婚して、以来ずっと娘と二人きりの生活です。しかし私の妹がいて、それがときどき家事を手伝ってくれました。

娘さんが半身不随になる

五十七年の十月のある日、娘の中学の自習時間中、娘は一番前の席についていたのですが、一人の男の子がうしろからサッカーボールを投げつけて、それが娘の首すじにあたつたのです。

それから手足がしびれて歩けなくなつたので、浜松のE病院へ十月二十八日に入院し、五十八年の三月に退院しました。けれども、そのときも歩けませんでした。頸部挫傷という診断で、病院としては手のほどこしようがないというのです。昨年の十二月からどうにか歩けるようになってきましたが、それまでは手足のしびれも痛みも残つたままで、まったくの寝たきりでした。トイレに行くにも壁づたいにヨタヨタとほうようにしてやつと動けるという状態です。

そういうわけで普通の（西洋医学の）病院へ治療を受けに行くのはやめてしまつて、ハリ治療を受けることにしたので。私の姉が函館の小児科医の家内です。その息子が慶応の医学部へ入つて東京でアパート住まいをしながら学校に通学しているものですから、姉がその息子の所へ来て面倒をみながら、一方では肩

こりのために都内のハリ師の治療を受けたのです。

そのハリの先生は医学に造詣が深く、姉が私の娘の病氣の話をしましたら、東京にいながら娘のすべてを見透すような話をされて、その内容がすべて的中していたことがあとでわかりました。

そのあと姉が病院へ見舞いに来て、まっ先に娘の首のうしろにさわるのです。そこにかたまつたものがあつて、ちよつとさわつただけでも飛び上がるほど痛いのです。そして、これがなくなるまではしびれは治らないよと、姉がハリの先生の話をつたえたわけです。

ところが病院の先生は、それは肩こりと同じだと言つて全然治療をしなくてくれません。まったく問題にしないので、私は怒つたので、そのE病院からH医大の病院へ行つたのですが、その先生も、そんなかたまりなどは病氣とは関係ないと言われるので、ここでも私はシャクにさわつて、「だつてケガをしてから、このかたまりが出来たままになつていっているじゃないか」とケンカみたいになつたのですけれども、とにかく全然治療してくれませんでした。

しかしハリの先生の意見として、組織と組織のあいだに内出血があつて、その血が残留して脊髄から出ている神経を圧迫しているから、しびれが治らないのだと姉が言うわけです。そのかたまりは首すじの右側にあるのですが、そのため左側のマヒがひどいだろうと先生がおっしゃつたようですが、たしかにそのとおりなのです。

がアダムスキーの名を覚えて下さつたのです（编者注||岩崎敏夫氏のこと。本誌81号に「私は異星人に守られている」と題する異色の記事を執筆された。それから私はアダムスキー関係の本を読むようになってたいへん感動しました。そして久保田先生に手紙を出してGAPに入会しました。約十年前のことです。

しかし当初は機関誌「ニューズレター」を読むだけで、GAPの会合などに出席することもなく、仕事が多忙なために流れに押されているだけでした。野口敏治さんが静岡支部を設立されて誘いを受けたときも出席しませんでした。

五、六年前に初めて静岡支部に出席して野口さんと初対面し、それ以来たびたび参加するようになりましたが、その後、娘がケガをしてからは親一人子一人の家

それで退院してから動けなかったけれども、一度東京のハリの先生の所に行きました。いつまでも東京にいるわけにはゆきません。姉が息子のアパートにいつもいるわけではなく、函館の家と東京とのあいだを飛行機でUターンして行ったり来たりしていたのです。

そこで中伊豆温泉病院に勤めておられるGAP会員の高梨和明さんに電話をかけました。この方はハリハビリ関係の仕事をしておられるので、たぶん有力なハリの先生を知っているのではないかと思ったのです。

すると、浜松に盲学校があつて、そこでハ리를教えている先生がその地域の権威者だということでしたので、その先生を紹介して頂いて、毎週二回そこへ治療を受けにかよいました。治療費も安く、三百円です。東京では三、四千円でした。

そうして、約一年ほど治療を続けましたが、結局、東京のハリの先生が予告したとおりになりました。浜松の治療でだいぶ痛みもしびれもとれたのですが、まだ左足が完全によくならず、また東京へ行つてダメ押しの治療を受けましたところ、磐田を出たときはピッコをひいていた娘が、帰るときはスタスタと歩いて帰りました。これは昨年十二月のことで、それ以来現在に至っています。

天竜川の河口で毎日テレパシー送信をする

しかし高梨さんの話では、五カ月も入院して、しびれが取れないのは神経に損傷があつたからにちがいないので、

本当はハリでは完全に治らないはずだがということでした。なぜなら、しびれや痛みの取れないマヒ状態のまま病院から出されたのは、現代医学で治療のほどこしようがないからで、おそらく神経に損傷があつたからだろうと高梨さんはおっしゃるのです。

一方で私は考えました。磐田市はかなり近代化されてきましたが、天竜川の河口はまだ自然の状態を保っていますので、私はかねてからそこが気に入っていて、そこへよく行つては空中を観測したりしていました。周囲が広々としているために想念も宇宙的になるんです。

それで、毎日のように天竜川の河口へ行つて、娘の病気が治るようにと思念したのです。

静岡支部には黒田保夫さんが反覆思念法で偉大な業績をあげておられます。その思念は「治る、治る、きつと治る」というような言葉を無数にくり返すのですが、私の場合は言葉を少し変えて、「娘の病気は治る、治る、きつと治る、すぐ治る」と唱えたあと、母船やスカウトシップ、あるいはオーソンさんの顔などのイメージを心中に描きながら、「どうぞ娘の病気を治してやって下さい」という言葉をつけ加えました。

これを声には出さないうちで唱えながら、約三十分間、その想念を空間に放ちました。これを実行しますと、「治る」という言葉を三十分間に五百回ぐらいい言うこととなります。そうすると一年間には十八万回ぐらい唱えることになるんです。

▼天竜川の河口。ここで鈴木さんは毎日テレパシーで送信した。



天竜川の河口にいますと、地球の先端に
いるような気がします。水平線が空と
水とを二分して、自分が地球から突き
出たバルコニーにいるような感じになり
ます。それで空中というよりも宇宙へ想
念を放ったというフィーリングが起こる
んです。

これを実行しましたのは昨年の三月か
らで、十二月末頃まで続けていました。
約一年近く、毎日都合のよい時間帯に車
で行って思念を行いました。

暖かい気候の頃はクッションを持参し
て堤防に座り、野口さんに教わったので
すが、青空や水平線を凝視してミラクル
ワードを唱えるのです。寒くなつてくる
と大変ですから、自動車で行って、助手
席から水平線を見つめながら車内で反覆
思念を行いました。

ただし反覆して思念を放っているとき
にUFOが出現するという現象はありま
せんでしたが、娘にはいろいろと不思議
な体験があったようです。

黒いUFOが出現！

(以下は愛娘、潤子さん(一五)の話)
私が入院したのは五十七年の十月二十
八日で、浜松のE病院です。

たしか十一月のなかば頃のある日、な
げなく空を見ていたら私のベッドは
窓際にありました。隣に寝ていた人が、
あの黒い物は何だろうと言うものでは
から、見ると、黒い物体がこれぐらいの
大きさに見えて(と言いながら両手の指で
円形を作る)、窓が一個あるように見え

ました。中央に山ができてくるようでした。
そのとき見習いの看護婦さんがいたも
のですから、UFOではないかと思ひ、
「あれ、何？」と聞いてみたんですが、
ちょうど浜松市内にボヤがあつて、皆さ
んはその方に注意を集中していたために
気付いてくれませんでした。

そのボヤが終わってから私が物体のこ
とを言おうとして、もう一度見たら、も
う物体は見えなくなっていました。スー
パーマーケットがよく風船を飛ばしま
す。それにしても同じ位置に停止
していましたが風船ではないと思いま
したから、やはりUFOなのだろうと隣
のベッドの人と話し合っていました。

イエスの顔をした雲を見る

今度は夜中のことです。これは私だけ
の体験ですが、病院にいとベッドが固
いので、どうしても一日に一回は目があ
くんです。

ある日の夜、といつても三時か四時頃
でしたが、やはり目が覚めたとき、窓が
光つたんです。それでブラインドを少し
あけて外を見ると、オレンジと赤が混ざ
つたような光体が二個、北へ向かつて飛
び、またもどつて来て、それを二回くり
返しました。これは五十七年の十二月頃
です。

その他には地震の夢をたびたび見まし
た。秋田地震の前日に地震の夢を見た
翌日、あの大地震がありましたし、北海
道地震の前日も地震の夢を見たので、

お父さんと一緒に超能力だといつて笑つ
たんです。

これは夢ではなく実際に見たんですが、
やはり入院中に、ある日窓の外の大空を
見ていましたら、男の人の顔みたいな雲
が現れているので、びつくりしました。

お父さんが毎日病院に来て、GAPの
機関誌をよく読むんです。あるとき、79
号を持ってきて、それを読んだあと、私
のベッドの上に置きましたので、開いて
みると、先生がお書きになった「イエス
の聖骸布の謎とアダムスキー」と題する
記事があつたので、私もそれを読むうち
に、イエスの聖骸布の写真があるのを見
てハッとしました。あの雲はこの顔にそ
っくりだったので、約十分間見えて
いましたが、検査に行かねばならなくな
つて、ベッドを離れましたから、あとは
どうなつたかわかりません。他にその雲
を見た人はいなかったようです。

不思議な金髪の人間の像

退院してからも、よく空を見上げてい
ましたが、ある日の夕方、空中に土星み
たいなリングを持つ光体が見えたく
それですぐお父さんと呼んで二人で見ま
した。そのようなリング状の光体は三回
ぐらい見ましたが、他にも大きな光体を
何度か見ました。

これはお父さんも信じてくれないほど
の不思議な体験ですが、金髪の人間の姿
を見たんです。私の家には金星人オーソ
ンさんの写真がかけてあるんですが、そ
れと似たような人を入院中にガラス越し

に見ました。これは五階の窓ガラスを透
かして現れたんです。そこにはペランダ
があるんですが、そこにもし人間がいた
とすれば大きく見えるはずですが、私
が見た金髪の人はずっと小さいんです。
ただし上半身だけで、上下の長さが三十
センチぐらいでした。

これも昼間のことで、かなり長いあい
だ見えていました。その顔は室内の方を
斜めに見ているようでした。すでにオー
ソンの写真を見て知っていましたか
ら、パッと見たときに、これは金星人か
なと思つたんです。長い髪をして、ゆっ
たりした服を着ていました。約四十分ぐ
らい見えたと思います。五十八年一月の
正月すぎの頃です。隣のベッドの人
も退院していませんでしたから、他に
見た人はいないんです。

こうした不思議な体験を病院の先生方
には絶対に打ち明けません。先生
方によれば私の病気は神経的なもので一
種のヒステリー症とみなされていまし
たから、変な体験を話そうものなら、た
ちまちま精神病患者にされてしまうから
お父さん、先生方にはしゃべるなど注意
してくれました。

でもアダムスキーの本は少しむつかし
いので、あまり読みません。活字の文字
が小さいと読む気になれないんです。で
もときどき少しひねくられて、「お父さん
は金星人の存在を信じているの？」と言
たりしたあとで、こんなことを言えばオ
ーソンのさんにきられるんじゃないかし
らと考えたりします。ですから「アンネ
の日記」のまねをして、日記を書くとき



▲鈴木謙次郎氏(右)と潤子さん。

には——といっても毎日書いているわけではないんですが——必ず最初に「前略、オーソン様、アダムスキー様」と書きます。そうすると日記もだんだんと、この二人にたいして手紙を書いているようになるんです。これはとても楽しいことです。

いまは病氣も完全に治って、普通の健康体になりました。中学三年ですが、病氣で二年留年したものですから、もう一度二年生になる必要がありますが、遅れたことを全然気にしてはいません。むしろ病氣をしたために多くのいろいろな体験をつむことができて、自分の人生にプラスになったと思っています。将来は新

聞記者が小学校の教師になるのが夢です。

親の願望のあらわれ?

(鈴木氏の話)

男手一つで娘を育てるのは大変でしたが、妹がよく手伝ってくれましたし、それに函館にいる姉がスーパーウーマンみたいな人間で、あちらで人一倍働きのながら、私たちの面倒もよくみてくれましたので、とても助かりました。娘が入院中も、函館、東京、磐田と飛びまわっていました。このようにして、きょうだいの援助を受けてなんとかここまでやってこられたわけで、有難いことだと思っています。

ところで人間の願望を実現させるのに、想念の力が重要であることはアダムスキー哲学でよく説かれていますし、先生も力説されますが、実は娘の病氣について思いあたるフシがあります。

といいますのは、娘は小学校のときに成績が優秀だったものですから、本来ならば高校進学に有利な中学に入れるべきだったのですが、私は本屋をやっていた多忙でしたために、どこの学校がよいかということ調べてみませんでしたし、良い学校へ願書なども出さずにいたために、普通の中学に入れてしまいました。そのとき娘は体操部に入って勉強が遅れがちで、英語と数学が良い点が取れなくなりました。中学は基本的な学習の場だから、もう一度勉強のやり直しはできないもの

かなあと、そのような願望を内心いだいでいたのです。そのために結局、その願望が、かたちに残って、娘がケガをし、留年して、もう一度やり直すことになったのではないかと、気がして仕方がないのです。もう病氣は治ったからよいようなものの、子に対して親がへたな願望を起すこと、恐ろしいことになることを痛感しています。まったく想念の力というものには強力です。ですからケガの原因となった男の子を私も娘も全然うらんでいません。ただ自分を反省しているだけです。

編者付記

この記事は去る三月四日、静岡市で鈴木氏と潤子さんから長時間聞いた話をまとめたものである。鈴木氏はきわめて純粋な方で、書店経営という職務のかたわら、天竜川の河口へかよってテレパシーによる病氣治療の思念送信を続けるほどの熱意を秘めながらも、それを顔に出さない、もの静かな謙虚な人である。

一方、潤子さんは明朗快活で、ハキハキと話し、いつも楽しそうな表情を浮かべた、頭のよいお嬢さんという印象を受けた。歩行ぶりは普通人と同様で、まったく異常はなく、現代医学から見放された半身不随がこうまで根治したとは驚くほかない。ある程度はハリが効いたとも考えられるが、神経をやられたこの種の病氣を百パーセント治すほどの効果はないと専門家は言っている。そうすると、やはり鈴木氏の熱意にこたえたスペース・ブラザーズが上空から何らかの放射線

を送って治したのだろうか。これに類似した例が他にもあるところを見ると、物的証拠はないけれども、充分に首肯できることである。

ここで誤解なきように強調したいのは、鈴木氏が河口で思念したといっても、宗教の信者のように両手を合わせて合掌したのではないということである。GAPが実践する宇宙哲学はあくまでも人間の想念の力を重視する物理的な基礎をもつ哲学なのであって、絶対に宗教ではない。またスペース・ブラザーズを宗教的な礼拝の対象にしているわけでもない。この点を混同してGAPを宗教的だと批判するのは全く的はずれである。

われわれはこの太陽系内の地球以外の全惑星に高度な発達をとげた人類が存在して、ひそかに地球に救援の手を差しているという「事実」を確信し、これを一般に周知せしめるための活動を展開しているのである。このスペース・ブラザーズの詳細に関する記事はアダムスキー全集の内、特に第一巻を読みたい。「折り」とはまさに思念そのものであるが、宗教信者の折りには明確な対象がない。一方、われわれが実践するテレパシーは受信者が存在して、想念波によるコミュニケーションを確立しようとするものである。偉大なテレパシー能力を有するスペース・ブラザーズが、地球人の送信に応じて奇跡的な現象を生ぜしめたと思われる例はたびたび発生している。したがって鈴木氏のテレパシー送信にたいしてブラザーズが具体的な反応を示したと考えてもけつして不合理ではない。

家族全員でスプーンを曲げた!

なる議な 不思議な 一夜

十 菱 麟

Tさん、P学会におけるスプーン曲げ拒否反応は私にもわかりません。「どうせ出来やしない」と私も昨日までは決めていたのですから——。

今日は愉快子（奥さんの名）が五十本もスプーンを買ってと言っています。（全部曲げてしまったので）台所のはなくなつたし、実験用にも要るし——。

今、昨夜の夢のような出来事を復習しています。

「スプーンが曲がるくらいなら痔なんか治すのは屁でもない」というある自信も芽生えています。

光彦は投げ曲げだからさすりもしなかったが、悠久の場合も柄の曲がった箇所に関係ないようなサジの所を一心にさすっていました。最優秀の音仁（四歳）に至っては、さすりもせずに瞬間にグニャツと曲げたのには目を疑いました。彼は母親思いなので、すぐ元通りにして流し

でタワシで洗っていました。

こんな幼い子に「曲げたときの意識は？」と聞いても何の答も出ないでしょう。

大人の私にはいろいろな意識的にとらえられますが、それは解釈であって、大人同士では伝達上役に立つかもしれないというぐらいいで、現実は何を思おうと感じようと、曲がるものは曲がるのです。

しかし大人の追跡分析すると、

1. 初めに目をつぶって無心の域に入った

（子供は初めからこの心境になる）。

2. 念力というが、別に強く念ずるのではない。ごく素直に曲げようと思うだけです。

3. 心の目にスプーンが曲がった姿が浮かんだと同時に、金属粒子がアメのようにグニャグニャになった実感がした。

4. 軽く指に力を入れる。曲がりだした。そこでいわゆる意志力を出したら金属が抵抗した。それでまた無心に返り、やり直して、今度は前よりグニャグニャになった。一気に曲げたらU字型のようになつた。「元へ戻してごらん」と妻に言ったら妻はできない。

5. またさつきの無心に戻つたら難なくまつすぐになる。そのまま逆に曲げたら曲がり部分でプツツと切断。柄の端の一番固い所も曲げてみました。フォークの歯の所も少し時間がかかったが出た。

6. 今度は目を開いて視線にエネルギーを乗せてやってみました。これも出来る。この辺になると乗りに乗って、そこらのフォークやナイフをかたっぱしから曲げだした。悠久も目をみはって「お

父さんも天才だ」と叫んだ。

天才どころではない。十年間曲げられなかったのが、六歳のわが子を先達にしてよく観察し、子供の波長に合わせたら出来たのです。悠久がいなかったら相変わらず私の能力は眠ったままだったでしょう。

プラスチックでも同じと思って、今度は二十センチの長さのボールペンにとりかかりました。力づくならポキんと裂け目ができて折れるはずなのに、曲げたいところのプラスチックが突然グニャグニャになり、やはりアメのように曲がりだしました。外側がゴムのようになりかみついて二つにならないので、もつと軟化させて引つ張つたら、ゴムのように糸を引いて結局切れてしまいました。

結論は、意力と筋力はジャマということです。私は長らく「念力とは意力のこと」と思い違いをしていました。本当は力を抜くことでした。この体験は私に思いあたることがありました。それは東京オリンピック前後によくやった「隠れみの」の実験、つまり心の波を消して改札口を通過するとか、富士山五合目のバスの中で同じことをやったら、車掌が何度くり返しても私を員数に入れない（したがって無料）とか、無札で汽車に乗っけても車内検札の人が、四人がけの席で私にだけは手を出さず、かるく目礼して去つたとか、当時食堂や旅館はみな無料ですんだとか、沢山の事例のときの私の「心の波の使い方」

と共通なのです。つまり、

1. あれしよう、これしようと思わぬ。

2. 不安が全然ない。

3. 心の波がゼロで呼吸もほとんどまってる。

4. この世のものでない別次元にいる。

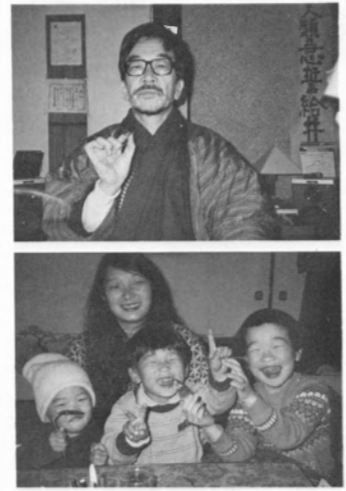
金属グニャリのときの感覚も、やはりこの「別次元」に入っていることを感じます。

それから托鉢の旅でスシ屋などで二千円の飲食をし、手元に五百円しかなく、ほかに托鉢に出た者から電話がきて、「どうしても三百円しか集まらないのです」と悲観的な声が出たとき、フツと別次元に入って、「いいよ、こつちに帰つてきなさい」という声が出て、彼（または彼女）が店に帰来する途中、フツとある人に惹かれて近寄つたら、その人を通じて二千円の金が「湧く」とか、これにも実によく似ている、いや同種の体験なのです。この世にせつばづまると、この世次元でジタバタしてもどうにもならぬので、フツと「あの世」に移行する——そのコツを体でおぼえて、ずつとやってきた私でした。

そのレパートリーに今一つ新しいスプーン曲げが加わつたというのが私の場合の実感です。

「氣武道」というのもこれと同じ「氣」で創出または発見したものだし、ソボ探しの指の感覚もそれだし、子供の病気を治すときのお祈りにもたしかに「ソレ」を使ってきました。

昨日も昼間、どうしてもスプーン曲げが出来なかつたとき、ふと悠久が、



▶曲げたフォークを持つ十菱氏(上)と夫人、二子息、令嬢たち。

「お父さんは病気を治すのがうまいから、スプーンも曲がるはずだよ」と言いました。

私は内心「ソレとコレとは違う」と思ったのですが、夜になって出来たところをみると、息子の言うとおりでした。悠久にしてもテレビのユリ・ゲラーの刺激がなかったら、やろうともしないし出来なかったでしょう。

私にしても今までユリ・ゲラーのテレビ番組を何度見ても出来なかったのですから、悠久が「尊師」としてそばにいなかったら出来ないままだったのではありません。この「場」を作ってくると、感電のごとく近くの人も出来るようになるみたいですよ。

昨夜の場の最後では通子赤ちゃんも別にしても、愉美子すらわずかですがスプーンを曲げました(私は女だから曲げたりにこわしたりはクライイと言っていました)が)。

このレターと証拠品がお宅のお子たちにどういう影響を及ぼすか、よくわかりません。なんの理屈もなくグニャツとゆかもしれません。もちろん悠久が出張して子供同士の遊びの中でやれば、赤ちゃん以外はみんな出来るはずという確信はあります。

教育的には「人間の心は物質を支配するんだよ」ということが子供によくわかるでしょうし、ユリ・ゲラーの夢のごとく、十億人が心を合わせたら世界の核兵器をニュートライズ(発射・爆発機能を働かなくさせる)することも、あながち不可能ではないと思います。妻の願いは「超能力を治療に応用すること」です。手のひら療治的なものは今の私でも出来ますが、この道をたどるとキリストの奇跡的治癒にも通じるでしょう。

それにしても私の実感はユリ・ゲラー同様、どうもこの力は「自分」から出たと思えないことです。

ゲラーは、外宇宙の卓越した知性存在(つまり宇宙人)から彼の超能力が来ていると感じるとくり返し言っています。私にはまだよくわかりません。

(以下は編者宛の書簡)
久保田兄

1. 一家のスプーン曲げ体験では、人々がふつう考えているような思念力(たとえば丑の刻参りや五寸釘を打つような)は全く使わず、むしろそれがジャマになったこと。

2. UFOや宇宙人の援助を願うということも誰もやらなかった。

3. 私の感じでは、無気、無心、無念、無想のうちに、私の中の何かが金属の分子間にやさしく入って行ったようですが、音仁坊やの場合などみてみると、ある瞬間の「気の高揚」でクニャツと曲げていました。

4. あの初めの「不思議な夜」。もししたら宇宙人が私のホームにあるパイプレーションで包んで、「あれ」を可能にしたとも考えましたが、二日後に妻(昭和二十六年生)が新しく買った大型の強いスプーンを曲げたときは、家事の合間の孤独作業で、それも一、二分のことだったのです。そのころは子供たちも興味を失っていて、「おかあさんも曲げたの」と言う程度でした。ですからどうも私の知識や推理は一切歯が立たず、「曲がったから曲がった」とでも言うよりほかはありません。

科学は、同じ条件なら、いつでも、だれでも、どこでもやれる、というものを客観性の基準にしますが、スプーン曲げはHとOの化合のようにはゆかないのです。

私自身、あの「不思議な夜」の次の日に「自分にも超能力が開けたか」と喜んで、再度スプーンに挑戦しましたが、何も出来ません。「パワーが消えたか」宇宙人の臨在がないためだろう「くらいに理屈をつけて断念していたら、三日目、つまり中一日おいて妻が何となく独りだけやってしまったのですから、全く困ってしまいます。

「超能力一家になろう」などという野心はなく、また新聞記者がカメラマンをつ

れて来て、見ている前でやってくれと言ったって出来るかどうか全く自信がありません。しかしファミリーの「エピソード」として「あれ」があったのは「事実」であります。そして「二度と起こらぬ」とも言えないのです。

非常に偶発的なものですから頭脳的操作で再現することはとてもむづかしいということだけは言えます。

ユリ・ゲラーのようなプロでも、出来ないときは外に出て行って、大空を仰いで、「あなたがたの力を貸して下さい」と叫びたくなるというのですから、プロにもプロの悩みがあるのでしょう。

古来の宗教に伴う行力とはたしかに別のもので、きわめて二十世紀的な新現象ということではできません。

物の本を読んでも「頑^がぜない幼児が金属をアメのように曲げた」ということはどこにもないので、旧約聖書にも古事記にもどこにもないと思えます。

ですからスプーン曲げは一つのサインカシグナルで、私たちが一つの「予測不能の時代」に突入しているということは言えそうです。

筆者・十菱麟(じゅうびしりん)氏は大正十四年生、東京出身。東大文学部卒業、高校教員、大学講師、出版社々長等を経て各種の求道団体を主宰。現在は大阪県に在住し隠遁生活を続けている。エドガー・ケイシー、TM瞑想その他の訳著書がある。日本GAP客員会員で、編者とは古くからの求道仲間。

テレパシーと透視

久保田 八郎

(日本GAP会長)

前回までは主として想念の力や中心にイメージを描く方法によって奇跡的に願望を実現させる方法を詳述しましたが、本号では私たちが求めてやまないテレパシーや遠隔透視などの開発について述べることにしましょう。

こうした能力の有無に関して検討することは論外ですから、当然のことながら、ここではこれらの能力が万人の内部に潜在しているものとして、いかにすれば開発できるかを述べることにします。

むかし私が都内の田町の駅前へ出たとき、二人の男が広場の隅で実演をやっている光景を目にしました。五十歳ぐらいの白衣にハカマを着用した男が目隠しをして後ろ向きに椅子に腰をおろし、別な中年の男が説明をしているのです。聞くところ、白衣の男がすごい透視能力者で、これから実験をするから、五、六人前へ出てくれと言います。そこで数名の人が前に進み出て、言われるままにポケットから財布その他の小物を取り出して、てのひらに乗せます。

すると目隠しをして後ろ向きに座って

いる男が、まるで肉眼で見るかのように各物品の名をかたづけばから言い当てるのです。その透視術はまことにあざやかなものでしたから、見物人たちはインチキだと思っただけで、みなゲラゲラ笑っています。

しかし術者の近くへ寄って目隠しの部分を凝視していた私は、直感的に「これは本物だ」と思いました。目隠しに使われているタオルは薄汚く黒ずんでいますが、その内側にはタネも仕掛けもありませんが、なぜか強い印象となつてわき起こるのです。

真夏の太陽が照りつける駅前広場のこの驚異的光景に私はしばし呆然となりましたが、そのうちおかしなことに気づきました。この二人組の男は品物を売る大道商人ではなく、そうかといって透視術の見物料を取ろうともしないのです。解説役の男は何やら人生哲学めいた話をするだけで、金を取るのが目的でこんなことをやっているのではない、だいいちこの見物人のなかに金を持っている奴はおらん、などと言っています。

この不思議な男たちの姿は今でも鮮明に脳裏に焼きついており、なぜあんな実演をやっていたのだらうと疑問を起すことがあります。

あまりに不思議な出来事は一般人が信じない

ところで、人間のあまりにも驚異的な言動は容易に一般人が信じないという例を右の二人組が示していますが、この最大の事例はアダムスキーでしょう。彼の体験なるものは「鬼面人を驚かす」体のものだったらしく、いまだに詐欺師、偽善者、その他の汚名を投げかける人があつとを絶ちません。別な惑星に転生したといわれるアダムスキーは、いま頃、苦笑しながら地球を見ているでしょう。

しかし狭い地球とはいえず、世の中には、どこに不思議な事件や出来事が存在しているか、わかつたものではありません。本号に掲載した「沖繩のUFO事件」、「テレパシー送信と奇跡的治癒」、「ある不思議な一夜」などがそうですが、私自身が見聞した事件も少なくありません。

数年前、拙宅へ一人の驚くべき人物が尋ねてきました。年の頃は四十歳に少々達しないと思われる男ですが、この人は実は古いGAP会員で、私がむかし郷里の島根県益田市の実家を本拠にしてGAP活動を行っていた頃に、高校生として訪ねて来たことがあります。

なぜ驚くべき人物かといいますが、本人はこの十数年間全く一睡もしないで生きてきた人間だと告白したからです。すでにGAPから離れて久しいのですが、

彼自身があまりにも不思議な体験を持ちながら、この世の中でだれ一人として信じてくれる人がいないために、思いあまつて私の所へ来たというのです。「GAPを主宰している久保田なら信じてくれるだらう」と。

人間はおよそ一カ月も睡眠をとらなければ結果は死です。食欲、睡眠欲、性欲は人間の肉体に属する三大欲望で、このいずれをも除去するわけにはゆきません。ところがこの驚くべき男、H君は、なんと十数年間一分間も眠らずに全くの不眠で生きてきたというのですから、信する人がいないのは当然です。本人は何度も大病院へ診察を受けに行つたけれども、医師から全然相手にしてもらえず、ついにはウソつきとか精神病者にされて狂人扱いにされたというのでした。

私にはH君がウソをついているとは思えません。ただ、ギネスブックの同君が少々不利になるのは、過去に競馬にこりすぎて家の財産を使い果たし、勘当同様になつたという事実があることで、これも同君の告白によるものです。それに十数年間不眠状態であつた事実を立証する物的証拠がないという点もあげられます。

しかし物的証拠がなければいかなる驚異的事実をも信じてはならないという唯物論的教育の蔓延した現代では、まずH君の体験を信ずる人はいないでしょう。

私がここで言いたいのは、唯物論教育云々よりも、世の中には一般人の想像を絶した不思議な現象が存在するということで、不思議なるがゆえに一般人は自己

の知識レベルに照らして容易に信じよう
としないという点にあります。

なぜ今、テレパシーか

さて私たちは不思議世界を不思議でも
何でもない当然あり得る世界として探求
しています。テレパシーや透視力もその
一部分です。私たちがこうした超常能力
に強い関心を持つようになったのは、ア
ダムスキーが数種類の宇宙的な著書で伝
えてくれたからで、特に彼の名著『テレ
パシー開発法』を昭和三十年代に私が訳
して文久書林より出版してから日本で、
『テレパシー』という言葉が流行したと
記憶しています。それまでこの種の類書
は存在しなかったと思います。

なぜ彼がテレパシー問題についてこう
も詳細に語り、また私たちがこうまで熱
っぽく探求するのでしょうか？

それは彼の雄大なスケールで描写され
た宇宙人との会見記に、偉大な進歩をと
げた別な惑星の人類は、地球人の思いも
よらぬ能力であるテレパシーや透視力な
どを身につけて、それを駆使し、想像を
絶した高度な社会を建設していると述べ
てあるからです。

もちろんこれらの著書の内容をすべて
事実であると断定した上でのお話であつて
、
真実かウソかと論議する段階では探求の
対象にはなりません。私たちが——少な
くとも私が——彼の著書の内容を真実と
確信する理由は、三十年に及ぶアダムス
キー問題とUFO事件類の研究調査と、
私自身の特殊な体験にもとづいています

が、ここでは詳細を省略しましょう。

テレパシーの絶大なメリット

問題はテレパシーや透視力などの宇宙
的能力です。私たちがこれに着目する
のは、従来の哲学や宗教には一定の限界
があつて、どうしても人間の知覚力をあ
る狭いカラ以上に伸ばせないことをイヤ
というほど知つているからです。

この数千年に及ぶ地球の歴史で出現し
たあらゆる宗教や哲学をもつてしても、
地球が平和にならないのは、人間の理解
力を頭脳中心の思惟だけに頼つてきたか
らではありませんか。これではいかなる
思考といえども、しよせん『推測』の域
を出ません。したがつて真に他人を理解
することは困難です。他人が理解できな
ければ誤解は争いとなり、ついには戦争
になります。

そこで浮かび上がつてくるのがテレパ
シー、透視力などの一連の超常能力です。
これらのテレパシクな感知力、すなわ
ち頭脳による思考を超えた理解力こそ真
に他人を理解する強力な武器となるでし
ょう。

端的に言つて、人間が互いに心の内を
感知し合つて考えていることを見透かし
合えば、相手に対して害意を含んだ想念
などは起こせません。また誤解なども一
切生じないことになつて、人間は調和す
るでしょう。このメリットには図り知れ
ないものがあると思ひますが、何よりも
テレパシクな感知力を持つてば、自分自
身が間違いない人生を送れるようにな

るでしょうし、困つている人を助けるの
にも絶大な力を發揮できるようにするで
しょう。

しかもこのテレパシーや透視力は一
般の人間の内部に蔵されているにもかかわ
らず、地球人はそのことに気づかぬた
めに、マインド（心）による思考だけに頼
りながら、結果の（現象の）世界」だけ
で生きているのだとアダムスキーは言
つています。だから地球人は生老病死で四
苦八苦し、煩惱のトリコになつてジタバ
タしているわけです。

一方、テレパシクな感知力を駆使す
れば、自己の希望の実現に際して、どの
ような手段を講ずればよいかが、内部か
らわき起こる印象としてやつて来ますか
ら、間違いない道を進むことができる
ようになります。

たとえば商談に際して、新規に取引を
開始しようとする相手がいかががわしい有
価証券をつかませようと企んでいる場合
に、相手の想念を読み取つて未然に防止
することができますし、テレパシクな
感知力のない人がそのような取引で騙さ
れようとしているのを、そばから忠告し
て助けてあげることも可能です（ただし
新規に取引する場合、最初から有価証券
を信用してかかるのは危険ですから、当
初は現金で取引を開始するのが普通のよ
うです）。

あるいは就職に際して、どのような職
業を選ぶべきか悩む人がありますが、
これもテレパシクな感知力によつて本
当に自分に適した理想的な会社に入れる
ようになるでしょう。

こうした確実性を求めるのに、テレパ
シー能力がどうしても開発できなければ、
反覆思念法やイメージ法を応用してもよ
いのですが、その詳細は本誌先号の『宇
宙哲学解説講座(3)』の「奇跡を起こす驚
異のイメージ法」をお読み下さい。

思考ではなくフィーリング

ここで言うテレパシー能力は単なる読
心術ではありません。アダムスキーの説
くテレパシーの開発法は、人間のマイン
ド（心）を人体内部に宿るコスミック・
コンシャスネス（宇宙の意識）と一体化
させたときに、その意識から真のインフ
ォーションが印象というかたちでマイ
インドに洩らされるというもので、した
が、テレパシーの開発にあつては、
人体その他万物を生かしている『宇宙の
意識』というものを認識してかかる必要
がありますから、テレパシー開発のトレ
ーニングを行えば、この汎宇宙的な意識
（これは宇宙の力でもあり英知でもあり
ます）を実感するレベルにまで昇華する
ことになるのです。すなわち宇宙の意識
というものを頭で考えるだけでなしに体
全身で実感としてつかむのです。これは
思考ではなくフィーリングの分野に入
ります。

すなわちアダムスキーの説く宇宙的な
哲学は徹頭徹尾フィーリングを向上させ
る方法を詳述したもので、思考の遊びと
はほど遠いものです。しかもこのフィー
リング向上のトレーニングはだれにもで
きるものだとおっしゃいます。なぜならテ

レパシーの能力は万人の体内に内蔵されているからです。

そのトレーニング法に関する詳細はアダムスキー全集第5巻『レパシー開発法』と第6巻『生命の科学』をお読み下さい。いずれも徹底的に改訂して旧版とは大幅に訳文が変わっていますから、これらをあらためて精読されることをおすすめします。

宇宙の意識は存在する

「アダムスキーの言う『宇宙の意識』というようなものは存在しない。万物はすべて偶然に出来たものだ」と言う人がありますが、これはショーペンハウエルの言う『宇宙の盲目的意志』論に通じるものがあるようです。現代の唯物論教育を受けた人は大なり小なり宇宙の創造パワ―または英知なるものを否定するでしょう。ニーチェに至っては、「神は死んでしまつてこの世界にはいない。この世界を支配しているのは、権力によつて他を押し、強者になろうとする意志だ」と言っています。封建性の強かつた時代にニーチェがこのように感じたのも無理はないでしょう。最後は狂人となつて死んだ彼をとかく言う気はありません。彼は彼なりの真理を発見したのだと思うだけです。

しかし現代のように遺伝子工学が目覚ましい発達をとげて、遺伝子が、DNA という長い分子上に書かれた暗号によつて出来ていることが発見された一九四〇年代後半以来、遺伝子は単に抽象的な記

号ではなくなるほどにその実態が解明されてきたにもかかわらず、人体にはまだ全く不可解な不思議な現象が山のようにあると分子生物学者は言っています。

早い話、人間の両手は約百億ほどの細胞から成っていますが、これらはトシをとるにしたがつて少しずつ老化し、死滅しますけれども、それにつれてあとから新しく作られた細胞によつて補われるために、人間の手はいつまでも手としての形が保たれているわけです。細胞がどんどん生まれまわってくるからといって、五本の指がなくなつて野球のボールのような球型にはなりません。これは不思議な現象であつて、おそらく個々の細胞は自分勝手に増殖するのではなく、常に周囲の細胞と打ち合わせをしながら、必要なときにだけ増殖しているらしいと、学者は述べています（講談社ブルーバックス・川上正也著『遺伝子についての50の基礎知識』より。著者は北里大学医学部教授）。

これは細胞のすべてが、ある宇宙的な意識を持つているからではないでしょうか。ところが現代の学者は『宇宙の意識』とか『宇宙力』とかを認めようとはせず、極力分析によつて物質そのもの原因を求めようとし、こうして表現をしません。もし「創造主が人体を創造し、生かしているのだ」と分子生物学者が言おうものなら、即刻大学をクビになるでしょう。それほど現代の科学は物質万能主義になつたのですけれども、物質を超えた神秘的な力の存在を認める学者がいなわけではありません。

たとえばライフ/人間と科学シリーズ

の「細胞と生物」の旧版の序文には、ロックフェラー大学教授ルネ・デュボが次のように書いています。

「第1章では、単細胞のユーグレナ（ミドリムシ）が暗やみのなかで数日間、まるで太陽が昇つたり沈んだりするのを知っているかのように生活するという驚くべき事実が示されている。ユーグレナだけが、このような性質を示す唯一の生物ではない。どんなに原始的であつてもすべての細胞は宇宙からの力を感じ、いまだわたしたちにはわからない機構によつてそれに反応している（以下略）」（傍点は筆者による）

ところが、この素晴らしい書物の新版では右の序文が完全に削除されています（筆者は両方を所有）。おそらく『宇宙の力』という表現が唯物的な科学に不適當とみなされたのでしょう。「実験によつて存在が解明できず、数字によるデータの出せないものは一切信じてはならない」という学界の不文律がここでも適用されたいちがいありません。

完べきな青写真の世界

しかしたとえ「素人」とののしられようが、あらゆる生物を生かす宇宙的な力または英知の存在を私たちは認めないわけにはゆきません。一部の学者はいくつや多数の学者でも——この宇宙的・根源的な力の存在を内心では認めていながら、口に出さないようにしているのではないでしょう。クビになつて職を失うのはだれしも怖いからです。

この宇宙的な力をアダムスキーは「宇宙の意識」と言っているのです。それはショーペンハウエルの言う『盲目的意志』というような不合理なものではなく、大宇宙空間に無数の天体や惑星を生み出し、しかも整然たる秩序のもとに存在せしめようとしている英知ある意識であり力であると言えます。超精密な人体と同様に、各惑星を一定の速度で運行せしめている力または英知の存在は、天文学の初歩をかじつただけでも明確に自覚できるはずで。

もつと大きく考えれば、いったい何がこの大宇宙を現象化せしめて存在させているのか、という疑問が生じてきます。またこの現象界とは何なのか、何かの投影なのか、投影でないとするれば、物そのものが実在するのか、実在するとすればなぜ変化し、生滅をくり返すのか、等々の疑問が無数にわき起こってきます。

そこでアダムスキーは、「大宇宙空間には宇宙の意識（または英知）が遍満しており、万物を完全な青写真どおりに完成させようとしているけれども、地球人はその宇宙の意識なるものを感知することができず、マインド（心）だけで判断しようとするから、迷いが生じて、そのために現象の世界を高次な状態になし得ないのだ」と表現しているわけです。

つまり現象の世界とダブつて宇宙の意識の世界が存在していると考えてよいでしょう。この宇宙の意識の世界は万物を完全な姿に現象化せしめようとする完べきな青写真の描かれた世界でもあり、絶対的な調和した世界であるとも言えます。

調和には一種の親和力が必要ですから、これは絶対的な愛の世界であるとも言えるでしょう。

プラトンのイデア論

「それはアダムスキー一人がそんなことを言っているだけで、現象の世界の背後に（またはダブって）完全な青写真原図の描かれた世界の存在など、だれも考えてはいない」と言う人があるようです。

とんでもない、二千数百年も大昔に古代ギリシアの偉大な哲学者プラトンがこれに類似したことをすでに述べているのです。プラトンのイデア論というのがそれです。

このイデア論に関して現代の哲学者の書いた書物を見ますと、おそろしくむづかしく表現してあって、何のことやらさっぱりわからないような書き方がしてあるのがほとんどですが、実際は簡単なことなのです。

いったいに書物というものはだれにも理解できるように平易に書かれたのが名著だと福沢諭吉は言っていますが、そういう本は少ないですね。

それはともかく、プラトンのイデア論というのはこういうことです。私たちは学校の幾何学で正三角形というものを学び、それをエンピツやコンパス、定規などを使用して紙に描きます。そしてだれしも自分は正確な正三角形を描いたと思っ

ています。しかし実際には完全な正三角形を描いた人はいません。なぜならエンピツまた

はインクなどで細いきれいな線で描いたとしても、その線を倍率百倍程度の顕微鏡でのぞいて見れば、拡大して見える線はグシヤグシヤの太いダンダラ模様みたいに見えるだけで、線の中心をなす本当の線はどこにひそんでいるかはわかりません。どんなにツルツルした素材に、どんなに細い線で描いても、電子顕微鏡で見れば、やはりグシヤグシヤに見えるだけで、本当の線は見えないでしょう。

つまり人間は真の正三角形を描くことはできないし、また真の正三角形なるものを見た人はこの世にいないのです。

それにもかかわらず人間は真の正三角形は「アル」と思い込んでいますし、事実、（実際は不完全だけれども）正三角形を紙に描くことによって幾何学の問題を解いたりしているわけです。

それなら真の正三角形はどこにあるのかといえますと、それはあらゆる人間の頭の中に「観念」として存在しているのです。そして万人の観念として存在するものならば、その原型または完璧な青写真がどこかに実在するにちがひありません。そのような原型が存在しなければ人間のだれもが観念として持つことはできないと言えらるからです。

以上の「観念と実在する青写真との関係」の内、青写真の世界をイデア論というのです。どうです、簡単なことでしょう。しかしこれだけの深遠な思想を二千数百年昔に持ったプラトンは実に偉大だとい

か言いようはありません。ところがプラトンは原型たる青写真を、人間の頭脳からはるかに離れた、どこか

遠い天界みたいな所にあると考えて、その青写真から投影された世界が現象界だとみなしたのです。

そこでプラトンの弟子であったアリストテレスが異議をとなえました。

「先生、それは違いますよ。イデア（エイドスともいう）の世界はたしかに存在するけれども、それは人間界を離れた遠い所にあるのではなくて、あらゆる人間や物の内部に存在するんですよ」

つまりこの世（現象の世界）と、あの世（理想的な青写真の世界）とは分離しているのではなくて、ダブっているというわけです。アリストテレスはこの完璧な青写真を「形相」と言い、現象の物質界を「質料」と名づけています。これがプラトンと並ぶ大哲学者アリストテレスの形而上学です。アダムスキーの宇宙意識論にはプラトンよりもアリストテレスに近いと言えるでしょう。

このプラトンのイデア論は後世のドイツ観念哲学者のヘーゲルやカントにも影響を与えていますから、西洋哲学はある意味ではプラトンを一歩も出ていないと言つてよいでしょう。

とにかく、不完全だらけの世界に生きる人間が、完全なるもの、美なるもの、善なるものを求めてやまないのは、青写真の四次元世界が現象界とダブっているからだというわけです。

全く独自のアダムスキーの宇宙哲学

さて、これがアダムスキーの宇宙的哲

学とどのような関係があるかは、もうおわかりでしょう。アダムスキーの言う、「宇宙意識」なるものは、プラトンのイデアと大体に同種のものであることが出来ます。完全に同じものかどうかは兩人に直接討論させなければわかりませんが、全くの似て非なるものとは言い難いようです。

したがってアダムスキーの言う「宇宙意識」すなわち宇宙的な力または英知なるものは、すでに大昔から偉大な先哲によって大なり小なり気づかれ、認識されていたのですけれども、アダムスキー哲学がかつて類のなかつた特殊な思想であると云えるのは、西洋哲学が思考による論理の構成を一歩も出なかつたのに対し、人間のマインド（心）を宇宙の意識（完璧な青写真の世界）と同調させ、一体化させて、自分自身を神人同一体にしてしまえと説く点にあります。

このような哲学は西洋にはありません。東洋の古代の哲学には類似した思想があつたようですが、現代はどうでしょうか。詳しいことは知りません。

それはともかくとして、自分のマインド（心）を内部の意識と一体化させるといふのがテレパシー開発の基礎段階です。こんなことはプラトンやアリストテレスその他の高名な哲学者といえども全く思いつかなかつたでしょう。だからといって西洋哲学はダメだと不遜なことを申すつもりは毛頭ありません。むしろ人間の思想の歴史として西洋哲学史を一度学んでみるのもわるいことではありません。いったいに西洋人はあらゆる面で物を

こまかく分割し、分析しようとする傾向がありますが、東洋人は逆に全体を包んでしまおうとする態度を示します。このいずれも大切な姿勢ですから、一方にかたよるのはよくないでしょう。

四つの感覚器官同士の衝突

さて、テレパシーの開発法に返りましょう。この実践的なトレーニング法はアダムスキーの「テレパシー開発法」に詳述してありますから、それをお読み頂くことにして、正直な話、この超常能力の開発は容易ではありません。きわめて困難と言っても過言ではないでしょう。

むかしアダムスキー存命の頃に、どこかの国のGAPリダーが「テレパシーの開発は至難の業で、これはライフワーク(生涯かかる仕事)だ」というニューズレターを各国GAPに流したことがあります。もつともなことです、しかしこの世をおさらばする頃になって、やっとテレパシーの能力が身についても何にもなりません。善は急げといいますが、とにかく急速に開発することを指すべきでしょう。といつても焦ることは禁物ですが。

アダムスキーは、「人間は四つの感覚器官に振りまわされて生きているために心が迷いに満ちている。まず四官をコントロールすべきだ」と説いています。これも従来の哲学ではだれもとえなかつたことです。

彼によると、人間のマインド(心)は、目、耳、鼻、口を形成する各細胞群の解

釈で形成されるが、外界の対象物にたいしてそれぞれが勝手に解釈するので、そのために細胞群間の意見の対立が生じて、これが原因となってマインド(心)に迷いが生じるというわけです。つまり人間のマインド(心)は主としてこれらの四官の意見から成り立つので、この四つの意見を整合し調和させる必要があるというのです。

細胞群同士で意見の衝突を起こすというのは全くの新説であつたために、アダムスキーの「テレパシー開発法」は当初嘲笑的になりましたが、前述のように現在の分子生物学はすごい進歩をとげており、個々の細胞間でコミュニケーションが行われていることは突きとめられていますから、いつかは四官衝突説は立証されるようになるでしょう。

アダムスキーが一九五〇年代にどうしてこのような知識を得たかは不明ですが、これも、これはおそらく別な惑星の偉大な人々から伝えられたものでしょう。

想念観察の重要性

さて四官のコントロールですが、これは自分の想念を観察することによって行うことが出来ます。言いかえれば、想念観察は自分の心の内部分裂状態を明確に知る最高の方法なのです。「自分で自分の想念を観察することなど出来るわけがない」と言う人は、心理学の初歩だけでよいですから少し勉強してごらん下さい。ドイツの心理学者ヴェントラによる初期の内観法という実験は、なんのことはない

一種の想念観察です。

また想念観察をやれば気違いになると言う人もありますが、これはあながち否定できません。というのは、かつて一般人がほとんど考えようとしなかつた自己の内界の想念を見つめて記録しようとするのですから、これを習慣づけようとすれば大変な努力を要するので、しいにはポーツとなるかもしれません。

そんな場合はけつして無理をせず一時休息し、落ち着いてからまた始めればよいのです。何事も強行しようとしてはいけません。

この想念観察は手帖に記録する方法があつて、アダムスキー全集第4巻「宇宙哲学」の最後に手帖の作り方が述べてありますから、それを応用して下さい。日本GAPはかねてから想念観察手帖を製作して頒布していましたが、資金難で絶版品切れになりました。

この想念観察をうまく行えば、自分がごく宇宙的に向上する様子がはっきりわかりますし、マインド(心)も澄み切つてきますから、しだいにテレパシクになります。しかしやめるとまた元へ戻ります。

私自身は昔から想念観察手帖を自作して、しきりに実習したのですが、現在は多忙のために手帖に記録こそしませんが、絶えず自身の内部にわき起る想念を見つめています。そして分裂想念が起こればすぐにそれを宇宙的想念に切り替えるようにしています。私は自分の想念を観察しないで生きることができません。

このような自己訓練を全くやらないで、ある朝目が覚めたら突然テレパシーや透視力が発現して、すごい超能力者になつていた、ということはずありません。それは自動車の運転能力はだれにも内在しているけれども、実際に運転の練習をやらなければその能力が出てこないのと同様です。

トレーニング法の詳細については、とにかくアダムスキーの「テレパシー開発法」その他をお読みになることをおすすめします。

空間の中に溶け込む フイーリング

さて前述のアイデア的宇宙の意識の問題に返りましょう。この宇宙の意識の世界、すなわち完璧な青写真原図の描かれた世界をかりに四次元世界と呼ぶことにしましょう。ただしこれは数学的なりーマン空間のようなものではなく、創造パワリーの満ちた、現象の世界をあらしめてい、いわば創造的次元世界ともいふべきもので、宗教的に表現すれば「天の父」の世界ですが、このように言いますと宗教だといって軽蔑する人がいるでしょうから、やはり創造的次元世界と呼ぶ方がいいでしょう。

私は以前から自分自身を空間の中に溶け込ませるようなフイーリングを起こす練習をやっています。空間といつても三次元空間ではなく、創造的次元世界の空間です。言いかえれば、この世の次元から異次元の世界に移り住むのです。



▲ローマ市内を観光馬車で見物するアダムスキー(右)。左は当時のベルギーGAPリーダー、メイ・フリットクロフト夫人。(旧姓はモルレ)。

といつても心霊の人の言う霊界ではありません。私たちは霊界なるものは一切存在しないと考える立場にあります。

ところで、現象の世界を表通りにたとえれば、創造的四次元世界は裏通りです。一列の家並みの表と裏の通りは文字どおり表裏一体をなすもので、これは写真にもたとえることができます。

写真というのは撮影後にまずネガが作られ、このネガに映画紙を密着させるなり引伸機で投影するなりしてポジのプリントが得られます。したがってネガとポジとは表裏一体をなすもので、全くの不可分の関係にあります。

これと同様に現象の表通りの世界はまともに見えるポジの世界ですが、この裏面の裏通りはネガの世界です。ここへ入り込んでしまうのです。

といつて自分の肉体を消滅させるのではなく、そのようなフリーリングを起こす

のです。するとテレパシクな現象が發生しますし、いろいろと不思議な体験を持つことがあります。

とにかくアダムスキーの「テレパシー開発法」はすでに大きな影響を与えており、これによりテレパシーの力を發揮している人が日本GAP会員中に何人かいますから、この書が人間を超高感度受信機に仕立てあげるための宇宙的な正しい方法を示した稀有の指導書であることは間違いないありません。

自分によって見られる物はすべて自分自身である

もう一つ重要な指導書はアダムスキー全集第6巻「生命の科学」です。この中の第4課「万物の相互関係」に次のような一節があります。

「この大なる英知と共に働くに際して

友星人が用いる方法は、心のかわりに自己の意識でもって万物を観察することにあります。わかりやすく言えば、彼らは観察される個体があたかも自分であるかのようにその個体について意識的になるのです」(同書65頁)

この部分は同書中で重要な箇所の一つと言つてよいでしょう。なぜならテレパシーの能力を開発するための基本的な心的態度として、「万物一体感」があげられますが、このフリーリングを高揚させるのはきわめて困難で、手がかりがつかみにくいのですけれども、それが右の記述で見事に表現してあるからです。

しかしそれでも見知らぬ他人を見て、それを自分自身であるかのような感覚を起すのは容易ではありません。そこで私の場合は空間に溶け込むようなフリーリングを起すわけです。

なぜなら、宇宙の意識の満ちた四次元空間は万物を包含していますから、自己と万物との一体感を起すには、まず空間全体の中に自分を溶け込ませるようなフリーリングを起さずならば、それはすなわち万物の中に溶け込むことになるからです。

以前は万物一体というので、やたらと空間の中で一定の体積を占める個体として分離した「モノ」との一体感を起さそうとしたために、うまくゆかなかつたのですが、自分と空間との一体化フリーリングによって、それが可能になったわけ

です。このことは「生命の科学」第10課「意識による旅行」の中で「あなたが不可視

の宇宙空間に関心を持つほど、ますます意識は肉眼が見ない物の印象をあなたの心に与えることになりました」と述べてあり、私の説明を裏付けています。

こうしてあらゆる人間、あらゆる物体を見る時、「自分によって観察されるものはすべて自分自身である」というフリーリングを強烈にわき起こすならば、——というよりも、何を見ても鏡に映つたもう一人の自分であるというふうなフリーリングが自然に起こるようになるならば、そのときこそ真のテレパシーや透視が発現するための突破口になるはず

です。昨年九月にイスラエル大使館主催のユダヤ民族とユダヤ教に関するシンポジウムが都内で開催され、招待を受けて出席しましたが、一人の学者の方がイエスの愛の哲学を批判して「自分を愛するよう

に他人を愛せよと言わたつて、アカの他人にたいしてそんなことが出来るわけがない」と講義しておられるのを聞いて意外に思つたものです。イエスが説いたのはマインド(心)による愛憎の愛ではなく、四次元空間における万物一体性を意味するはずで

す。自分であるかのように観じることができないでしょう。とにかく万物一体感を極端に高揚させたときにテレパシーや透視がパツと開花するものですが、透視については次号で述べましょう。

以上の説明で疑問のある方は遠慮なく筆者宛に質問状をよこして下さい。返信用切手同封をお忘れなく。(以下次号)



茨城支部発足

茨城県 清水勝一

十一月二十日のデザートセンターでの金星人オーソンとアダムスキー氏のコンタクトを記念して、昨年十一月二十日に私の家に六人集まり、実質上の茨城支部が発足しました。

昨年の総会後の夕食会の時に設立準備中の紹介をして頂きましたが、その時に日立市の嶋崎氏、大沼氏にお目にかかり、嶋崎氏の献身的な活動によりアツという間に茨城支部設立の運びになりました。

昨年十二月十八日に水戸市民会館で第一回の月例会を開き、東京本部より石川、石田、大久保の各氏に参加頂き、総勢九人で大成功裡に終了しました。第二回は今年一月十五日に実施しましたが、会員がカゼで休み、総勢四人でしたが、家族的雰囲気などでやかに開催できました。第三回は二月十九日に実施しましたが、大雪の後にもかかわらず宇都宮市より菊地さん、横浜市より川井さんが出席され、ウーマンパワーに溢れる月例会となりました。お集まり下さった方々に厚くお礼を申し上げます。

を未永く続けてゆきたいと思えます。まだ出席されていない茨城県の会員の皆様と全国の会員の皆様、機会がありましたらぜひご出席下さるようお願い申し上げます。

GAP活動を積極的に

東京 関 高明

今年には雪の降る回数が多く、ハレハレの影響が強まってきたように思います。先生には昨年「ムーンゲート」の原書の購入で大変お世話になりました。最近には独身時代のように行動がとれなくなり、平日は三十分ばかりの読書時間しかありませんので少しずつ読んでいます。

この本の購入の動機は次のようなことです。最近の米国、ソ連、東欧、西欧の超能力関係の研究者の活動が活発になっているようで（日本国内もそうですが）、こういった国外の情報にも精通していかなくてはという思いがするわけです。そしてこれら国外の動向をキャッチするには英語の実力を身につける必要があるわけです。「ムーンゲート」の本を通して英語の力を身につけるには、先生の方がたく思っています。

手記からスペース・プログラムの一環としてUFO問題とアダムスキー哲学の知識を一般に知らせることが重要であることを再認識しました。宇宙的カルマを持つ人々の発達はもとより、地球人の宇宙的発達のレベルアップのために、献本活動に自ら率先して行動する所存です。それとともにGAP活動がますます発展するようアイデアの提案等もおこなってゆきたいと思えます。今後ともご指導の程よろしくお祈りします。

素晴らしかった84号

兵庫県 仲間秀樹

当地方も天候が回復し、少し寒さもゆるんだようですが、山々や道路の傍は残雪で大地が顔を出すのにはまだ早いようです。

先日的小包とはひと足違いにUコン84号を頂きました。今回もさらに純粋にGAPの真の姿にせまされた素晴らしい記事で、ますます心強くなります。毎回の機関誌の素晴らしさに待ち遠しく感じます。特に今回は先号からの連載記事の「驚異のイメージ法」が素晴らしかったと思います。感心しているばかりではダメなのですが、少しは必要性にせまられていることもありそうですので実行しています。

また松山の伊藤さんの記事も支部の活動を手伝って頂く上で非常に励みとなり、私も自分の役割においてホンモノでありたいという信念も強くして頂きました。何よりも久保田先生が（マインドがどうのこののというよりも）先生ご自身の天性として信念をもってホンモノの生き方をなさっていることに深く尊敬

書店卸しで知らせる運動を

栃木県 渡辺克明

雪も溶け、まさに春の気配の漂う今日この頃、いかがおすごしでしょうか。

さて先般送付していただきました「書店委託の方法について」のチラシにもとづき、宇都宮市の書店を回ったところ、亀田書店、岩下書店と契約いたしました。契約の内容は亀田が十冊、岩下が五冊です。

宇都宮市は人口三十八万人を有する県内最大の市であり、契約した二店とも人通りも多く、会社員をはじめ大学生、高校生の来店も多いところです。ここ二店の状況を見て、将来的には私の地元鹿沼市（人口八万六千）にも契約店を作りたいと思っています。

当然のことですが、いくらアダムスキー氏が偉大であり、その提唱することが素晴らしいことだとしても、それを理解する方法がなければ人々はそれを理解することはできません。知る方法、つまり通路（入口）がなければいけないということです。それもそれが広いのに越したことはありません。そこでアダムスキー氏の教えやGAPを知っていただくために数冊ずつでもよいですから広く全国の書店にこの種の書物が出ることを望みたいと思えます。もちろんこのようなことがなくとも、現在のテレビ等の話題ぐらいでUFOを知り、アダムスキー氏を知ってGAPに入られる人もいます。考え方によっては誰にでも同じチャンスが与えられているからで

献本、大歓迎を受ける

山形県 清水敏恵

いつも大変お世話になり、どうもありがとうございます。おかげ様で順調に日々の生活の中にアダムスキー哲学を実践していくことができます。献本活動や委託販売の方も良い結果を生みつつあるようです。特に献

本活動は大歓迎して下さり、また某女子高校ではアダムスキー氏の全集が一巻一巻図書室に並ぶのを楽しみにしている生徒さんも何名か出てきたそうです。全くこれからの楽しみなGAP活動ではあります。

しかし現実社会の雑踏の中や雑多な書物の中に、アダムスキー全集やそれを裏付けるGAP機関誌「UFOコンタクトライター」が置かれるだけで、そこには燦然たる輝きがあり、広く人々に対して開かれた窓であるように思われるのです。

書店との契約は、相手が利害関係で色々判断しますので、なかなかむつかしいところもありますが、一人でも多くの人々が真実に目覚めてくれることを願い、微力ながら努力したいと思っております。

最も純粋なグループ

愛媛県 小野 守

このたびは会費切れにもかかわらず「Uコン」をお送りいただきました。大変うれしく思いました。

GAPは会費も講義録音テープもいっさいが破格の低料金なので、会費納入が遅れると活動に支障をきたすと思います。千万遍も「ごめんなさい」と申します。私はGAPは広い世間の中で最も純粋な奉仕活動のグループだということを知っていますので申し訳なく思います。今後ともよろしくお願ひ致します。

はるかなるアラビア半島より

アラブ首長国 連邦 アブダビ 菅野文夫



▲アブダビにおける菅野文夫氏(左)

GAPの総会の夕食会の写真を見せて頂きました。私の知っている方はいません。うる覚えに一、二人の方に会ったかなと思うだけで、十数年前は十代二十代でも不安でしたが、その頃先生は「今は若くても、あとできっとしっかりと人々が出てくる」と言ったことを覚えています。今GAPの写真を見ると三十代の方が多いように思います。

私の写真を送らせていただきます。十三年前よりは生意気さが少々おとれたように思います。今この日本大使館の公邸で働いて、自分の解らなかつた、または解っていても理解不十分な言葉の使い方が体験できて良かったと思います。

アダムスキー全集の第1巻は持っていて読みました。いつ読んでもすごいと思います。GAP機関誌もありがたうございました。「ムーニングポート」の内容で、月に着陸したのは事実で良かったと思います。

すべてが良き方向に

秋田県 佐藤春雄

この冬は例年になく大雪の秋田でしたが先生にはお変わりございませんでしょうか。おうかがい申し上げます。お陰様にて拙宅別状なく過しております。

先生にはいつもいつも大変お世話様になりました。誠に感謝にたえせん。お陰様にて以前にアドバイスをして頂きました。X問題もその後ピタリと止まりました。近づくかなくもなりました。本当に自分でも不思議に思います。お酒の方も量がかなり少なくなつたし、めつたに酒場などには行かなくなりました。一時お酒はやめようかと思いましたが、これがなければおやじとの間がうまくゆかないような気がして、毎晩二人で一合三七キ程入る銚子一本で良しにしております。それで丁度良くなつてきました。どれもこれもひとえに先生のお陰です。本当にありがたうございました。

でももどが程度の低い私ですので改めるべきところが次々と出てきます。大変ですけれども、これまた日本GAPの先生はじめ全てのすばらしい会員の皆様のお陰様でいるんな事に気が付けるのと思ひます。この上ない幸せに思ひます。

素晴らしい松山支部大会

愛媛県 西本有水子

少しずつ寒さのものがあがるよう、なかなか晴天が続いてくれず、春が待ち遠しい今日このごろです。先日の松山支部大会は素晴らしいものでした。女の人というのはこの

惑星では何かと手かせ足かせが重く、どうにかすると確信とか信念となつてしまひます。しかしお話をうかがつていいますうちに、内部からモリモリと自信がわいてきて、大変楽しく心が軽くなるようでした。

実を言いますと、当日朝、家を出る時に主人にツノが出ていて、せつかく楽しく出かけようとしていたときに鼻をくじかれたので、どうしても少し気分が残つていました。でもそれが自然に消え去つて、ご講演の際に何度もオーソンの姿が目に見え、そのたびに大丈夫、心配しなくてもいいんだよという感じがしていました。

その後、夕食会の際中、六時四十分頃と思いますが、窓ごしにフラッシュをたいような強烈な光が二度目に入り、アレッと思つたのですが確認はできませんでした。それと、連があるかどうかはわかりませんが夕食会が終わつて九時七分の汽車に乗るつもりで松山駅に行つたところ、なんと駅に主人が迎えに来ていてびっくり。聞けば七時近くまで会社に行つたけれど、何となく迎えに行こうという気分になつてやつて来たのだということでした。すごく機嫌もよく、朝とは全く打つて変わつて別人のよう、何かツツネにつままれたような気がしました。

こういう断定はできないけれど、何かあるようなことが今までに何度かあつて不思議な気がいつもします。自分が想像する以上にブラザーズは敏感に私達の想念を感じとつておられるのかもしれないと思ひました。実質的にGAPに対して何らの

だれにも「生命の科学」1982年版 わかる 第4部完成!

1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録。完結編にふさわしく、久保田会長自らの特別寄稿文を備え、より完成度の高いテキストとなりました。

また、全巻を収納できる厚紙製のケースを作りましたので、併せてご利用下さい。

B6版 活字タイプオフセット印刷 300部限定発売
11・12月分+特別寄稿文 頒価 500円 送料 170円
厚紙製収納ケース 無料 送料 170円

申込先 〒983 仙台市五輪2丁目9-8(2F南)
安藤澄雄

☎(0222)91-7978 振替 仙台7-30019

※第1部(¥700)、第2部(¥500)、第3部(¥500)
とも多少の在庫あり。
送料 1冊¥170 2~3冊¥200 4冊¥250

貢献もできていない私のようなものに対して目を向けて下さるとすれば、何とも申し訳なく、またありがたいことだなあと思っています。

このことは別としても、その時フラッシュ光のことを夕食会場にいたある方に話したところ、「もちろん来てるよ」とおっしゃり、それを感じてると言っておられました。それは先生のご講演のなかばごろからようでした。私にはこういう敏感さがないので残念ですが、先生のいらっしゃる場所、行動のあるところ、必ずブライザーありという感じですね。GAPもこれからますます

重要な時期に入つてゆくと思えます。それとともに妨害がふえてくるかも知れませんが、そんなものはものともせず、まずそのご活躍がありますようにお祈りしております。

むかし見た円盤

静岡市 岩崎照代

本誌81号の「静岡にUFO流出」の記事を見てふと思ひ出した事があります。昭和二十二、三年頃でしたが、静岡駅の一つ西隣に用宗(もちむね)という所がありました。駅から南の方へ行くところ海岸に出ます。駿河湾です。晴れた日には伊豆半島がくっきりと浮かび、むかしは静かな漁村でした。この海岸で毎晩のように円盤が見られるという噂で、ちょっとした話題になり、新聞にも出たようでした(この事はある本で後年知ったのです。当時は私もまだうら若き乙女で、夏には友人とよく夕涼みにこの海岸に出かけました。昭和二十六年頃の夕涼み伝馬船で出かけて、静岡・富士山方面を向い

て友人と話していたところ、おわんぐらいの大きさのオレンジ色の物体がパッと出現したので、つきり子供達の打ち上げる花火と思い、「アツ花火」と言ったらたん、それはサツと西に二、三秒走り、パッと消えてしまったのです。

このとき円盤などという言葉も知らず、「ワツ火の玉見ちゃった」とばかり友達と二人で大急ぎで帰ってしまいました。これが第一回目の目撃です。その後この事は私の脳裡を離れず、一体何だろうという思いが円盤問題への追求となつたものと思われまます。

野口さんから静岡支部報49号を頂いたのが五十八年一月二十四日頃でした。昨年十二月のなかば頃、円盤を長時間にわたる目撃された記事が載っていました。

それから二日ばかりたつた晩のことです。なぜかちつとも眠くならない晩がありました。十二時になつても一時になつても目が冴えているのです。目をつぶるとある景色がはつきりと見えるのです(このような事はこの時一回きりです。その後はありません)。田舎のような景色で、道があり、小さな川に橋がかかつて、木があり、草地があり、石垣のようなものがあり、特別変わったものはないのです。最初はおもしろいなと見ていましたが、どこまで行つても長い道の感じで、だんだんイライラしてきました。もう起きて洗濯でもしようかと時計を見たら二時半で、いくらなんでも冬の二時半では早すぎるし、それに寒いなアと思索していました。そうだ気持ちを宇宙的想念に切り替

えて、と思い、心の中で「宇宙の善き皆様、昨年野口さんはたくさんの円盤を見られました。私は昔一度だけ見せて頂きました。どうか私にも円盤を見せて下さい、お願いします」と思念して瞑想に入りました。そのうち眠くなるだろうと思つたのです。

どのくらいたつたか、突然頭の中にパッと「富士火山系エネルギーの活動」という印象が起りました。アレ今たしか富士火山系と言つたナ(言つたのではなく感じたのですが)と思ひ、しばらく考えて、そういえば昨年暮から正月にかけて群発地震(三宅島)があつたけなア、それは巷に騒がれている三原山だか富士山も危険といふことか? すると今度は「北は浅間」という印象。エツ浅間は……。まだほかにもありますが、とにかく私はこれがテレバシーなのか何なのか全然わからないので、皆さんにお話する気にならなかつたのですが、後々の新聞に浅間山系の白根山が噴煙をあげた記事が出ており、やっぱりホントだったのかナと思う始末です。

最近のUFO目撃は五月の静岡支部大会の一週間前ぐらいの夜八時半頃、金色で十センチぐらいの円形物体が斜にすべるように南の空から飛行し、隣の屋根スレスレに走つて見えなくなり、心の中でアツもう見えないうつと言つたときに、それはパアツと光芒を放つてこたえてくれようすばらしい飛行で、心から宇宙に向かって感謝致しました。長々と書きましたが最近の出来事をお知らせ致しました。

輝く円盤が出現!

徳島市 池本晴美

今年(五十八年)八月三十日、夕方七時半か八時頃だつたと思ひます。もうあたりは薄暗くなつていました。知人の家の近くでなにげなくフツと上を見ますと、ちょうど私の頭の真上あたりに三十センチぐらいの輝く丸い球体が前の方から飛んで来ました。あまりに突然の事でとても驚きました。それは燃えているように、とても強烈な光を放つていて、尾を引いていました。

色は中が黄色で、まわりは黄色に少し赤みがかった、だいたい色でした。そしてちょうど頭の真上あたりからユラユラと揺れながら、後ろの三階建の建物の屋根の方へ飛んで行きました。急いで建物の横へ回りましたが、もう見えませんでした。見た時間は四、五秒ぐらいだつたと思ひます。そのときは大きさはわかりませんが、その後テレビのクイズ番組で、信号機の一つの電球の大きさは約三十センチぐらいだと言つていましたので、あの時の大きさと同じだと思ひました。

頭のすぐ上だつたのでとても驚き、しばらくは呆然となりました。すぐ近くで近所の主婦連が四、五人立ち話をしていました。誰か気づいた人はいかなかったようです。たぶん偵察用の円盤ではないかと思ひます。その他にも何回かUFOらしきものは見ましたが、そのなかで最も印象に残っているのは去年(五十七年)の八月九月頃、夜の九時頃だつたと思ひます。いつものように屋上に上がつてUFOの観測をしていまし

たら、急に星の一点が動き出し、スーッと真つすぐに飛んでから、パツと三つに分かれました。これもUFOに間違いないと思ひます。

それからもう一つは小学校の四年か五年ぐらいの時、夏の事です。近所の人達と夕涼みをしていました。前のおばさんが最近火の玉がよく飛んでると言うので、みんな得意いしょに見ようとするので、みんなどいっしょに二三百メートルぐらい離れた民家の屋根の上を、月ぐらいの大きさはあつたと思ひますが、オレンジ色の尾を引いた火球がユラユラと飛んでいました。皆はヒトダマだと言つていましたが、私はべつに恐くありませんでした。なんだか物体のようないやな気がしたからです。

でもその時はUFOだとは解りませんでした。GAPを知つてからはその正体が何であつたのかを知ることができました。その他は特になつた飛び方をしてるものではなくて、行つたり来たり、または一機をもう一機が追いかけてたりしているようなものです。いつも星のようないやなものです。

本誌83号のイスラエルの記事はとても感動しました。ゲッセマネの園や曠きの道の写真等を見てると涙が出てきました。五十九年のイスラエルの旅の記事を今から楽しみにしています。

いろいろな情報をたくさん載せて下さい。うちの母も世界中で一番好きなのは私サレムだと言つておりました。私達とはよく行けそうにないので、先生の情報を楽しみにしています。

楽しい機関誌

米ワシントン州 広田真知子

GAPの機関誌をいつも楽しみに待っています。友人の一人が機関誌のこかしこを見て、「なんと良心的で誠実な本だこと」と感心していました。もう一人GAPの会員がふえそうです。

ところで金星とか月とかの話をしているといつも私のことをバカにするホスト・ファミリーの十七歳の男の子にクリスマス・プレゼントにと思い、「ムーングート」(英書)を探し歩きましたが、全く見当たりにませんでした。手に入れる確実な方法はやっぱりGAPから送って頂くしかないかと思ったりしていませんか? あとゼナーカードも欲しいのですが送料とかどうかというふうによつたらいいか解らないので、それも教えて頂きたいのですが。お忙しいのに手をわずらわせるようなことばかり書きましてすみません。

(OK!)「ムーングート」の英文版はすぐ送ってあげますよ。アメリカから輸入した本をまたアメリカへ輸出するのはこれいかに! (编者) 今、別な友人に例の三冊の本「生命の科学」「宇宙哲学」「テレビジョン」を貸しています。私の方は何となくバツとしない毎日を送っていますが、全てが満たされるような毎日なんてこの世にはないのかもしれないですね。GAP会員の中で一番スペース・ピブルから期待されている会員かもしれないけれど、でも機関誌はいつも楽しみに待っています。がんばってください。

おめでた

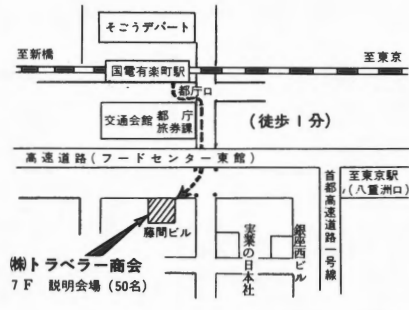
①去る三月二十日、日本GAP会員中根豊氏(青森支部代表)と近藤久美子さん(広島市出身)はめでたくゴールイン。会員同士による宇宙的家庭の建設の第一歩を踏み出した。ご多幸を祈るや切。写真上は青森県三沢市の古牧グラウンドホテルで行われた披露宴終了後、出席したGAP会員のみでカブルを囲んで撮影。

②続いて三月二十四日には会員・原永庫(はら・ながくら)氏(神奈川県)が川上恵さんと結婚。原氏は新潟市出身。県立新潟高校卒業後ブラジルへ勇飛し、学資をバイトで稼ぎながら名門サンパウロ大学医学部を優秀な成績で卒業。将来は教授になる道が残されたレジデント試験に合格しながら日本GAPの活動に協力するため資格を放棄して帰国し、慶応病院に二年間研修医として勤務す

第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」 — 第1回説明会 —

下記の要領で説明会を開催しますので、参加申込者、未決定で考慮中の方はぜひご出席下さい。

日時 5月20日(日) 13:00→17:00
会場 東京都中央区銀座2丁目2番19号 藤間(とうま)ビル7F ☎563-5461
会費 無料 (第2回説明会は7月22日(日)同会場にて開催)
携行品 筆記用具



るかたわらわずか八か月間日本式医学を独学後、昨秋は日本の医師国試にも合格、国内永住GAP協力強化のハラをきめた。新婦の恵さんはポルトガル語を母国語とするブラジル育ちの明朝女性、三月まで筑波大学に留学していた。二十四日夕方東京駅構内精養軒でGAP東本支部有志一同は盛大な祝賀会を開催してカブルの門出を祝福した。写真下。

第5回 松山支部大会、盛況

●三月十八日(日)
●ホテル「シャトーテル松山」
●(松山市)
●出席者 四十一名

● 前日は先生と連来の会員を囲んでささやかな歓迎夕食会を開いて旅の疲れを癒やしていただいた。
● 大会当日は前日までの悪天候とは打って変わってカラリと晴れ渡り、雲一つない日本晴れとなった。
● 野島哲浩氏の重厚な司会で始まった大会は、久保田先生の「アダムスキー問題の真実性」と題する御講演で雰囲気は最高潮に達した。先生はアダムスキーの偉大さをたたえ、想念観察による四官のコントロールによってテレパシー能力の向上を図ると共に、自分を空間の中に溶け込ませる「フィーリング」を起すことが異次元の世界に入るのだということ、ブラザーズに想念で呼びかけて一体化を更に深め

るようにと語られた。この御講演中に敏感な会員数名が上空から強い祝福のパワーが放射されているのを感じている。
● 夕食会は出席者のほとんどが日頃スペース・プログラムに協力している人々だけに会場は次元の高い雰囲気となり、歓談のあい間にはアトラクション、宇宙宝くじなどもあつて調和の中で時間が流れた。翌日はあいにくの雨で市内観光には不向きであったが近郊の名所巡回を行った。先生をはじめ遠来の方々、地元の方のご支援に深謝したい。



〈予告〉 59年度地方支部大会 —その2—

	第2回 群馬支部大会	第5回 仙台山形合同支部大会	59年度 大阪支部大会	第4回 新潟支部大会
日時	6月10日(日) 午後1:00→5:00	6月24日(日) 午後1:00→5:00	7月8日(日) 午前10:30→5:00	7月28日(土) 午後6:00→8:00
会場	「社会教育総合センター」2F 会議室 群馬県太田市熊野町23-19。 ☎(0276) 22-3442(代表) 太田駅北口下車、前方へまっすぐ徒歩約10分。タクシーなら2～3分。山のおもとの赤レンガ色の建物。東京方面からは浅草より東武伊勢崎線にて浅草発午前9:40→太田着11:09または10:40→太田着12:09が便利。前日の場合は浅草発2:40→4:14着または3:40→5:15が便利。急行ロマンスカーは全席指定。	「仙台市民会館」2F 第3会議室 ☎(0222) 62-4721 仙台市西公園内。 仙台駅より駅前通りを北に約50m行き、定禅寺通りに出てまっすぐ行くと、つきあたりが市民会館。徒歩約20分。タクシー5分。バスは駅前より「仙台市交通局」行きに乗車。「市民会館前」で下車、10分。	「大阪コロナホテル」 本館3階会議室 大阪市東淀川区西淡路1丁目。 ☎(06) 323-3151 国鉄 新幹線「新大阪」駅東口のそば。徒歩3分。	栃尾又(とちおまた)温泉 「自在館(じざいかん)」 新潟県北魚沼郡湯之谷村栃尾又 ☎(02579) 5-2211 上越新幹線「浦佐(うらさ)」駅下車、駅舎2Fの「新幹線改札口」を出る所に16:10までに集合。浦佐駅から自在館までは無料のマイクロバスを利用(所用時間40分)。東京からは上野発13:47発のリレー号に乗り、大宮発14:35の「とき311号」が便利。(あきひ号は浦佐に停車しないので要注意)
会費	¥2000(希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。グランドキャビネ判・送料共)	¥2000 (全員記念写真は左に同じ)	¥2000 (全員記念写真は左に同じ)	¥2000 (全員記念写真は左に同じ)
プログラム	司会 植松和子 1:00 支部代表挨拶 (久保寺信一) 1:05 講演「GAP活動の意義」 (日本GAP会長・久保田八郎先生) 2:20 休憩・記念撮影・全員自己紹介 3:00 質疑 5:00 閉会	司会 鈴木清隆 1:00 支部代表挨拶 (笠原弘可) 1:20 会員講演・題未定 (太田節子) 2:00 講演「現象の世界と宇宙空間」 (日本GAP会長・久保田八郎先生) 3:30 休憩・記念撮影 3:50 質疑 5:00 閉会	司会 長浜富春 10:30 支部代表挨拶 (平塚和義) 10:35 会員講演・南野・仲間 12:00 一昼食・休憩 1:00 講演「アダムスキー哲学の生かし方」(日本GAP会長・久保田八郎先生) 2:00 休憩・記念撮影 2:20 記録映画「エルサレム 宇宙考古学の旅」上映 3:30 休憩 3:45 全員自己紹介・質疑 5:00 閉会	司会 足立亘宏 支部代表挨拶 (星 富治夫) 6:05 講演「宇宙哲学実践法」 (日本GAP会長・久保田八郎先生) 7:05 休憩・記念撮影 7:25 質疑応答 8:00 閉会
夕食会	大会終了後6:00から8:00まで「ホテルサンルート太田」2F「あけぼの」の間で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000	大会終了後6:00から8:00まで「勾当台(こうとうだい)会館」で希望者による夕食会を開催。場所は国分町3-9。ニューシティーホテルより徒歩5分。 ☎(0222) 22-3301 会費 ¥5000	大会終了後6:00から8:00まで同ホテル内で希望者による夕食会を開催(立食形式) 会費 ¥5000	大会終了後8:30より10:00まで同会場の1階大広間で夕食会を開催。 (会費は宿泊料金の中に含まれています)
宿舎	「ホテルサンルート太田」をお世話します。(駅より徒歩5分)シングル 1泊 ¥5500 (全室バス付)	「ニューシティーホテル」をお世話します。定禅寺大通り国分町2-14(市民会館の近く)駅よりタクシー5分。☎(0222) 63-4191。 シングル 1泊 ¥4500 ツイン ♪ ¥8200	「大阪コロナホテル」をお世話します(大会々場に使用するホテル)。 シングル 1泊 ¥4950 ツイン ♪ ¥9020(税込) トリプル ♪ ¥11880	「自在館」をお世話します。1室4名様で宿泊。 お1人様1泊¥8000(税込) 28日の夕食会費と29日の朝食代を含みます)
申込	夕食会、宿舎、日光観光の申込はハガキで5月末日までに下記へお申込下さい。 〒373 群馬県太田市東本町27-32、久保寺信一 ☎(0276) 25-5958、夜間は、自宅の 45-3544へ。	夕食会、宿舎、松島観光の申込はハガキで6月20日までに下記へお申込下さい。 〒982 仙台市東十番町1番地 国鉄アパート1-18、笠原弘可 ☎(0222) 95-0725	夕食会、宿泊、神戸観光の申込はハガキで6月30日までに下記へお申込下さい。 〒661 兵庫県尼崎市水堂町3丁目16-8、平塚和義 ☎(06) 436-3478	夕食会、宿舎、奥只見観光の申込はハガキで6月末日までに下記へお申込下さい。詳細なパンフレットをお送りします。 〒946 新潟県北魚沼郡湯之谷村井口新田572番地 星 富治夫 ☎(02579) 2-5562
観光	大会翌日は名高い日光東照宮、中禅寺湖などへ観光ドライブに行きます。多数ご参加下さい。日光西参道の「つたや」で昼食休憩。5:30東武日光駅で解散5:40発特急ロマンスカーで7:25浅草着。費用無料(バス代と拝観料は支部で感謝サービス)、昼食代¥1000のみ要。	大会翌日は日本三景中、随一の名勝地「松島」を遊覧船で周遊します。素晴らしいツアーへぜひ。費用は¥4000。15:30頃に仙台駅で解散。	大会翌日は「異国情緒の港町を海から眺める神戸港めぐりと都に残された異国へのノスタルジアを求めて北野町異人館めぐり」を実施します。歓喜のツアーへどうぞ。国鉄新大阪駅10:30出発→三宮→北野町異人館散策→中突堤→神戸港めぐり→ポートタワー展望台昇り→港湾博物館見学。新幹線新神戸駅で17:00解散。費用約¥3500。	大会翌日は雄大な奥只見銀山平地区へマイクロバスでドライブ。溪流に沿ったキャンプ場を散策し、奥只見湖に面した湖山荘で昼食。帰りは新幹線浦佐駅までマイクロバスで送ります。浦佐駅到着は13:40。
備考	6月の月例会は大会のため中止。	6月の月例会は大会のため中止。	7月の月例会は大会のため中止。	7月の月例会は平常どおり22日(第4日曜)に行います。

※上記の他に今年度後半は次のような支部大会が企画されています。9月9日=札幌・旭川合同支部大会(札幌市)、9月23日=東京本部総会(東京)、11月24日=神奈川支部大会(川崎市)、12月中=茨城支部大会(日時・場所未定)。

ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳 全7巻
徹底的全面改訳決定版

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名著です。

1. 宇宙からの訪問者

338頁 ¥2500

2. UFO問題の真相

262頁 ¥2500

3. UFOとアダムスキー

350頁 ¥2500

4. 宇宙哲学

148頁 ¥1300

5. テレパシー開発法

190頁 ¥1800

6. 生命の科学

205頁 ¥1800

7. アダムスキー論説集

370頁 ¥2500

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会った体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第I部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会った実録を第II部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

第1巻の補足的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係述べた箇所は重要である。第II部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第I部「死と空間を超えて」が旺巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたばう大な情報と書簡類を収録して第II部とした。

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめぐす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係3著作の中心となるもの。

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の4官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシクな印象を感じる方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

アダムスキーが他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が旺巻。第II部にはアダムスキー研究者として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻¥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

☆1冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。

☆第1巻より第3巻まで一括注文＝特別セット価格 ¥7000(送料共)

☆第4巻より第7巻まで一括注文＝特別セット価格 ¥6500(送料共)

☆第1巻より第7巻まで一括注文＝全巻セット価格 ¥13000(送料共)

郵便振替または現金書留で
ご注文下さい。

文久書林 〒162 東京都新宿区榎町33 Tel. 03(267)6920 振替 東京4-2521

日本GAP企画第6回海外研修旅行

第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」

圧倒的な感動と歓喜の旅であった58年度の「エルサレム宇宙考古学の旅」の素晴らしいを再度満喫して頂くために、多数の方の要望にこたえて59年8月に第2次のイスラエル行きを企画しました。エルサレムを中心にイエス関係の遺跡を訪ねながら第1次の旅と大体同じコースをたどり、そのあとはスイスへ入国してルツェルン経由インターラーケンを経てさらに登山電車で美しいグリンデルヴァルト村へ登り、ここに宿泊して夢のようなスイスアルプスを望見します。帰途はルツェルンに宿泊しますので、スイス滞在は2泊3日となります。またオプション（希望者だけ）により登山電車で名峰ユングフラウにも登って大自然の美を観賞します。航空機はチューリッヒ経由のスイス航空ジャンボを利用。費用は¥498,000。（ただしユングフラウ登山は別途料金約¥10,000）。詳細は別紙案内書をごらん下さい。ハガキで下記へお申し込み下さればお送りします。



▲写真は58年8月の「エルサレム宇宙考古学の旅」

●案内書申込

ワールドセブントラベル株式会社 田中 正
〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F
Tel. (03)499-2461 夜間・休祭日は(0462)63-0615

個人団体を問わず国内外の旅行手配・航空券購入その他の予約は当方におまかせください。GAPの会員の方には安い費用でお世話いたします。

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2:00→6:30 ※5月のみ第2土曜日に変更。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。	¥300	2:00→3:00会員による体験講演。 3:00→4:30久保田会長の「宇宙からの訪問者」講義と近況報告、テレバシー練習、休憩。 4:30→6:30自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※7月は支部大会のため月例会は中止。	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎(388)7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先=平塚和義 ☎06-436-3478	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」(文久書林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレバシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※7月は支部大会なるも月例会は開催します。	新潟駅前「青年の家」☎0252-44-6766 連絡先=星富治夫 ☎02579-2-5562	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレバシー練習、座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3F 国際会議控室 連絡先=島津紳二郎 ☎092-672-6784	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレバシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30	名古屋市中区古沢町7-1「名古屋市民会館」特別会議室。☎(052)331-2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先=林 国宜 ☎0586-45-6468	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表・テレバシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先=笠原弘可 ☎0222-95-0725	¥200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、テレバシー練習、座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236-42-5181 連絡先=清水 正 ☎0238-21-5441	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※6月のみ午前9:00→12:00に変更。	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室 ☎011-241-9171 連絡先=伊藤重信 ☎011-742-0192	¥500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開、テレバシー練習、座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	プラザ静岡ビル8階(静岡駅北口すぐ)静岡市御幸町9-1 連絡先=野口敏治 ☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2F小会議室 ☎0166-26-1304 連絡先=阿部 堯 ☎01658-2-1585	¥500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表、アダムスキー著「宇宙からの訪問者」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレバシー練習、研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。	松山市民会館会議室 連絡先=伊藤達夫 ☎0898-22-3060	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答、座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2:00→6:00 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	群馬県太田市「社会教育総合センター」3F。連絡先=久保守信一 店 =☎0276-25-5958 自宅=☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開、座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室2) ☎0177-34-0163 連絡先=中根 豊 ☎01756-3-3386	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレバシー練習、研究発表、座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00 ※5月の支部大会は中止。	〒901-22 宜野湾市野嵩1547 マキシアパート 新里方 連絡先=新里義雄 ☎09889-3-3695	¥500	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。久保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレバシーの研究報告。自己紹介座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。☎0188-24-5377 連絡先=伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前 連絡先=大崎孝典 ☎0492-65-0389	¥400	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表、座談会等。
茨城支部	毎月第3日曜日 午後2:00→5:00 ※今年8月は第4日曜日。	水戸市中央1丁目4番1号「水戸市民会館」2F 小会議室(203号室) ☎0292-24-7521 水戸駅より徒歩10分同駅南口より徒歩5分。 連絡先=清水勝一 ☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「宇宙からの訪問者」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習、座談会、研究発表等。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.82 主要記事「静岡に頻出するUFO」野口敏治
「沖縄に出現した宇宙人」新里義雄
「スペースプログラムへの協力と宇宙的成長」伊藤達夫
「転生とカルマ」久保田八郎
改訳「テレパシー開発法」(2) G. アダムスキー / その他

No.83 主要記事「NASAは真相を隠していた！」ウィリアムL.ブライアン
「人体オーラと人間の発達度」速藤昭則
「転生とカルマ(2)」久保田八郎
「UFO目撃報告」UFO CONTACT
「異星人イエスの大地へ」久保田八郎 / その他

No.84 主要記事「月の引力は1/6ではない！」ウィリアムL.ブライアン
「私のUFO目撃とGAP活動」石川公一
「スペース・ブラザーズは注目している」伊藤達夫
「UFO問題とサイレンス・グループ」イブ・ラウルト
「奇跡を起こす驚異のイメージ法」久保田八郎 / その他

各 ¥700。*バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙からの訪問者」解説講義録音テープ

昭和58年12月より59年度中にかけて東京月例研究会で毎月1〜2章ずつ日本GAP会長・久保田八郎先生が解説される録音テープです。アダムスキーの宇宙的なものとご自身の体験の現実性と深遠な宇宙論を再認識する上で最重要な資料。久保田先生ご自身の驚くべき体験も洩らされることがあります。平易な説明と雄大な内容をぜひお聴き下さい。各支部必須のテープ。

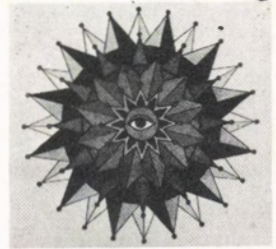
テープ1本(90分) ¥1000 千200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(第1章より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502 振替名古屋7-51065



①



②

① オゾン肖像写真 ② シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオゾンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービ判・カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

① ¥600 千120 ② ¥300 千60一括注文の場合千120

③ テレパシー練習用
ゼナーカード

William.L.Brian 著

「MOONGATE」

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。

美観箱入り。
¥600 千120

本誌に連載中の「ムーンゲート」の原書を取次頒布します。英語学習にも好適。希望者は定価 \$11.95を円相場に換算し、送料・手数料¥1,500をプラスして振替でご注文下さい。(注文時に \$1.00=¥240ならば、\$11.95に¥240をかける)

日本GAP

編集後記

★「ムーンゲート」の秘話も次第に佳境に入ってきました。NASAが隠している驚異的な事実を次々とばき出す痛快さにはこたえられません。

★「沖繩のUFO事件」も意外な事実を突きとめたすばらしいレポート・ジュエです。調査された新里義雄氏に感謝します。

★「テレパシー送信と奇跡的治癒」はGAPならではの感動的な実話です。半身不随の娘さんが全くの健康体になるとは!

★「ある不思議な一夜」の筆者・十菱麟氏は社会の表面に出ない方で、知る人ぞ知る稀代の人物です。むかしから編者の友人で、久方ぶりに興味深い原稿を寄せられました。

★「テレパシーと透視」はアダムスキーの著書「テレパシー開発法」と「生命の科学」の解説として書いたものです。右の二著についてはかつて東京月例会で各一年間ずつ詳細な解説講義をおこなったことがあり、その筆記録を安藤雄雄氏が頒布して下さり、その筆記録を本号36頁の広告を参照の上、同氏に合照会を

★アダムスキー全集は刊行がやや遅れましたが、四月に第七巻が出て、めでたく全巻が完了しました。大慶至極です。来たる四月二十九日の静岡支部大会ではこの全集完結の祝賀会が盛大に開催されますので多数ご出席下さい。幸い입니다。大会の詳細な予告は本誌前号(第84号)38頁に出ています。

★その他今年度の各地方支部大会は去る三月の松山支部大会を皮切りに活気に展開しつつあります。ふるごとご参加下さい。

★今年八月実施予定の「第二次エルサレム宇宙考古学の旅」は、すでに参加申込者が二十

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団!多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう!入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう!

日本GAP

名近くに達して活気を呈しています。この調子なら団体旅行の成立は確実ですから参加予定の方は準備をすすめて下さい。五月二十日には東京で第一回の旅行説明会を開催します。本号37頁の予告を参照の上、考慮の方でも一応ご出席下さるようお願いいたします。

★前号に予告しました「沖繩支部大会と観光の旅」は参加希望者が少ないために残念ながら中止のやむなきに至りました。多大の労力をついやしてご準備頂いた沖繩支部の方々に全く申し訳ありません。またの機会を待つことにします。

★住所を変更された方は、ハガキに①旧住所②新住所③氏名④会員番号を並記してご通知下さい。新住所だけでは整理不可能です。

★本誌の書店卸し協力者を求めています。日本GAPは営利事業でないために大手卸店を通すことができません。約八十名の会員の方の奉仕活動により都内と地方の書店に直接卸して委託販売されています。協力希望の方はハガキでお申し出下さい。案内書をお送りします。

★原稿募集 本誌は読者から原稿を募集しています。UFO目撃、宇宙的な不思議な体験(心靈的なものは不可)、宇宙哲学の実践、科学記事等の原稿をお寄せ下さい。四百字詰原稿用紙を使用、ペン書き(エニツ、ボールペンは不可)、一行を十八字にしてタテ書きとし、十枚以上四十枚まで。匿名やペンネームは自由ですが必ず住所と本名を明記(K)。

※東京月例会は五月のみは第一土曜日から第二土曜日の十二日に変更しますのでお間違いなさようご注意ください。

日本GAP機関誌・季刊 夏季号
UFO contactee 85号

編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365-1818
TEL (03)65110958
振替東京41359112
一九八四年四月発行
定価七〇〇円・送料200円

